

重んじ、亦之を確信するに至るを以てなり。
 五 心の群疑、悉皆煙散霧消に歸するといふは、イエスの足下に跪く
 に由りてなり、イエスの温乎たる顔を拜し奉るに由りてなり。其
 の仁愛なる約束に耳を傾くるに由りてなり。祈禱に由りてイエス
 と親しく交際するに由りてなり。されば信仰の保證を得んことを欲せ
 ば即ちキリストの許に行くに如かず。

第卅九章 イエスに効ふ事

『それ神は豫め知りたまふ所の者を其子の状に効せん』と豫め之を定
 む』—— 羅八〇廿九
 『我れなんぢらに例を示せり此は我がなんぢらに行し如く爾曹にも
 行はしめん爲なり』—— 約十三〇十五、

聖書に吾人の効ふべき事即ち吾人の類似すべきこと二様あるを説け
 り即ち吾人は世に効はざればキリストに効はざるべからず此の兩者
 は互に相反撥し互に相排斥す凡そイエスに効ふことを冥々の中に妨

ぐるもの世に効ふことよりも甚だしきはあらず。酈つて又此世に効ふことは、イエスに効ふとを以て制するにあらずんば、即ち其効を見ると能はざるべきなり。

弱年の信徒諸君、諸君が享有せらるべきものとなりし新生命は是れ天に在す神の生命なり。此生命はキリストに由て啓示せられ、顯明せられたり。永遠の生命は其のイエスにありて、働きイエスにありて果を結びたる如くに、亦諸君にありて果を結ぶべく、イエスの生命によりて諸君は永遠の生命の如何なる働きを我になすやを知るを得ん。左すれば諸君若し己れを捨て、剩さず残さず己れをイエスに献げ、永生の制裁内に其身を置かば、期せずしてイエスに効ふの生涯を送るを得べく、若し

太二十一、廿六、廿七、廿八、廿九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

太二十一、廿六、廿七、廿八、廿九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

然らざらんとするも到底能はざるべきなり(イ)。

イエスの例を追ふて、真に之を模倣し、此の模倣に於て益と發達せんとすれば、特に必要なる二あり。我は真にイエスに効はんが爲め召されたるを明かに知ると及び、我は之を遂行する力あるとを確信すると是れなり。

抑も靈性の生命を最も残酷に妨害するもの、一は神の吾人に屬望し給ふ所を解せず、亦知らざること、是れなり(ロ)。

吾人の理會力は、尙ほ充分に開發したるものにあらず。吾人は尙ほ眞正に神に事ふるといふことに就て、幾多の人類的思想と想像とを蟬脱せず、吾人は我が唯一の教師たる聖靈を待つこと、左程に切ならず、吾人は神の最も明白なる言に對

哥前二〇
三、弗一〇
十、七、
十八、
約十三〇
十五、〇
十、七、
同十八、

弗五〇二
非二〇
五、三、
〇十三、
哥前十一
〇一、十
後三〇十

してさへ、尙ほ神の望ませ給ふだけの力と意義とを有せざるとを自ら
悟らず、吾人にして斯くの如くイエスに類似するとは如何なることな
るかを精神的に悟ることもなく、また如何ばかり切にイエスの如き生
活をなすべきの命を受けし身なるかをも悟らざる間は、真正にイエス
に効ふといふの意義共に談ずるに足らざるなり。願はくは吾人此點に
於て特別なる天啓の必要を認むるに至らんとを(一)。
吾人若し此の必要を認めんと欲する乎、然らば即ち吾人がキリストに
効ふとに就て神の言ひ給ひし所望み給ふ所を知るため、熱心聖書を研
究する所あらしめよ(二)。吾人をして絶えず聖書の斯る言を咀嚼し、且つ
之を親しく我心に貯へしめよ。又之を吾人の心に銘刻し、之に由りて全

く己れを主に献げ己れを主の望ませ給ふ萬事たらしめよ。また聖靈の
吾人を啓發し、イエスの生命を信者として見られ得るたけ、充分に見得
るやう、信じて祈るべし(ホ)。左すれば聖靈は吾人がイエスにも劣らず父
の聖旨と榮光のため、且つは亦イエスの此世に處し給ひし如くに處せ
しめんとて、召されし身なるを確信せしめ給ふべきなり。
之に次で吾人に必要なることは、或程度まで主の狀に効ふことは實際
吾人に出來得るとなるを信する是なり。不信仰は是れ薄弱無能の原因
なり。然るに却ていふものあり、曰く、吾人は薄弱無能なるが故に主に効
ふことを得るものと信する能はざるなりと。此の説たる是れ神の言に
抵觸するものなり。吾人がイエスの狀に効ふに至るとは、自力を以て之

約十二〇
廿三〇
後十三〇
三弗三〇
十八七

亞八〇
六太八〇
路一〇
七廿九
五同四
八〇廿
七〇廿
〇七二

を爲すにはあらず然りイエスは吾人の首なり吾人の生命なりイエスは吾人の中に宿り其の生命は即ち内より外に其聖靈によりて聖力を働かせ給ふべきなり(一)。

然れども、こは吾人の信仰と相離れて別に存すると能はざるものなり。信仰は心の應諾なり己れを捨て、イエスの働きに委ねるとなり、イエスの働きを甘受するとなり、汝の信仰の如く汝に爲るべし』とは神の王國の憲法の一なり(ト)不信仰が何如ばかり全能なる神の働きと祝福を妨ぐるの力を有するかは殆んど信すべからざるものありて存すされば信徒にしてキリストに効はんと欲するものは特に此の祝福の我が握り得べきと我が企及せられ得べきものなることを確信せざるべから

約十四〇
十九同
十〇八
後三〇
九弗一

ず又全能なる神の恩寵に由り或點までは眞に其摸範に効ふとを得るものとしてイエスを仰ぎ見ざるべからず亦イエスにあるの聖靈は我が衷にもあるとを信せざるべからずイエスを嚮導し、イエスを助けたる父は亦我が上をも守り給ふとを信せざるべからず曾て地上に生息し給ひしイエスは今我が衷に居給ふとを信せざるべからず此の三位一體の神は今我を神の子の狀に變らせんとて盡力中なることを確信せざるべからず(二)。

如斯信仰を有するものは必ずイエスに効ふとを得べしされど篤く祈らざれば即ち其甲斐あらざるべし故にイエスに効はんとするものは特に神とイエスとに會談し間斷なく交際せざるべからず若し夫れ此

の恩恵を得んと欲し、時間を惜まざりて喜んで犠牲を献くるものは必ずイエスに効ふを得べきなり。

神の榮光の光輝神の實質の肖像なる神の子よ 我は主の像に似るべきものなり 主のうちに我等の造られたる神の像を見奉る 我等は主に由りて再び神の像に造られたり 主なるイエスよ主に効ふことを以て我靈の唯一の希望たらしめたまはんとを アーメン

一 イエスに効ふてふ字義は吾人自ら理會するを得たりと思ふべきれどイエスにも劣らざる様此世を送るは眞實に神の希望なりと

いふ一點は悲しひかな、吾人の虚極めて未熟不充なり。若し夫れ充分に此の眞意を解得せんすれば長くイエスと併に居り、且つ祈り、且つ其の模範を熱慮考按せざるべからず。此の書の著者は嘗て此の問題に關して一書を著はし、屢次之れを人に語りたることあり。されど其人尙ほ自ら、こは眞なるか、神は眞實イエスにすら劣らざる生涯を送らしめんとて吾人を召し給ひしかば叫ばざるを得ざるに至ると往々あり。

二 『イエスに似よ、神の子の状と神の子に効ふとを論ず』 (『Like Jesus; Thoughts on the image of the Son of God and our Conformity to Him』) 題する一書あり、是れイエスの状の種々の方面と且つ之を受くる最も確實の手段を論述したるものなり。

三 世に効ふとは、世と交はるによりて特に烈しく成り行くべし。イエスの思想、イエスの性質、イエスの舉動に効はんを欲するものは即ちイエスと交はらざるべからず。

四 イエスの生涯の大特質は如何にいふに、他なし、人類の爲めにきて己れを捨て、全く主に献げしといふと是れなり。さらばイエスに効ふさいふとの大特質は如何にいふに他なし、滅びたるものを贖ひ、且つ之れに祝福を興ふるため、己れを捨て、之をイエスに獻ぐるにあり。

五 イエスの内部の性質の大特質は其小兒の如くなりし一點にあり。小兒の如くさは、何事も全く父に依頼し、喜んで父の教を受け、父の聖旨をなすに少しも躊躇せざりしといふと是れなり、諸君此點

に於て特にイエスに似よ。

第四十章 此世に効ふ事

「然ば兄弟よ我神の諸の慈悲をもて爾曹に勤むその身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に献よ是れ當然の祭なり又この世に効ふ勿れ爾曹神の全且つ善にして悦ふべき旨を知らんが爲めに心を化て新にせよ」羅十二〇一二、

此世に効ふ勿れされど此世に効ふとは抑も何の謂ぞや曰く是れイエスに効ふとの反對なり蓋しイエスと世とは互ひに正反對の地に立つものなればなり世はイエスを磔殺せりイエスと其弟子とは共に世の

ものにはあらざりき此世の靈と神の聖靈とは互に相反撥す世は神の靈を受くること能はず是れ世はイエスを見ずまたイエスを知らざればなり(イ)。

而して此世の靈とは何ぞや此世の靈とは神の聖靈に依りて洗滌せられざる生來固有の状跡のまゝなる人類を動作せる靈即ち是れなり此世の靈は悪魔より來る悪魔は是れ此世の王にして神の聖靈に洗滌せられざる凡てのもの、主宰なり(ロ)。

此世の靈は何によりて其真相を發露するか抑も亦此世に効ふとは何によりて其真相を發露するか聖書は之に答へて曰く「凡そ世に在るもの即ち肉體の慾眼目の慾また勢より起る驕傲これらは皆父より出

約十四
三十四
一十六
二〇
二二

約十四
十七
二十
二十四
二十六
二十八

るに非ず世より出るものなり』と快樂の慾即ち世の喜樂を慕ふの念財
 産の慾即ち世を我有とせんとするの念名譽の慾即ち世に敬はれんと
 するの念此の三のものは是れ此世の靈の三個の重なる形骸なり(ハ)。
 而して此の三のものは其根抵其本質に於ては即ち一體なり此世の靈
 は人己れを自己の目的となすものなり己れを此世の中心たらしむる
 ものなり己が權下にあるたけの凡ての生物を我に事へしめずんば止
 まざるものなり有形界に己れの生命を求むるものなりされば世の靈
 は人をして自己の名利を求めしめ有形の事物を慕はしむるものなり
 (三)而してイエスの靈は之に反して人をして己が名利の爲にせず有形
 の事物の爲めにせず只神の爲め無形なる事物のため此世を送るに至

約五二〇
六十五十

十約五〇四

哥後四〇
十五〇七
十五〇七

雅四〇四

らしむるものなり(ホ)。
 人或は榮華幸福の生涯を送り陽に罪を犯すといふにもあらず亦敢て
 不義なるとを行ふにもあられざれど尙ほ且つ世の友たるとあり随つて
 亦神の敵たるとあり之を思へば寔に恐ろしく危険なるとどもなり(ヘ)。
 地に屬けるものゝことを思ひ煩ひ何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ひ我
 が有てるものと尙ほ是れより得んと欲するとを思ひ煩ひ我が此世
 に表はすべきものと増加するを得るとを思ひ煩ふ是れ吾人が生涯の
 要素にして取りも直さず之を此世に効ふといふ人自己の利慾を有形の
 事物のために一身を委ねながら以て基督教徒たるの躰面を維持し得
 たりとなし或はキリストを信ずるものと自認するとあるを思へば如

何にも恐ろしく亦危険なるとどもなり(一)。此理由なるが故に世に効ふ勿れ、イエスに効ふべしとの嚴命凡ての信徒の上に下れり。果して然らば余若しイエスに効はんとすれば如何にして世に効はざるとを得るか他なし乞ふ先づ前掲の題詞を讀んで之を熟思せよ。其中に吾人の學ぶべき教訓二あり先づ其の第一よりいはんに凡そ此世に効ふ勿れ』との命令を受けたるものは神の祭壇に己が身軀を献げしものに限る。さればイエスに効はんが爲めには己れを神に献げよ。己れを神に献げしものとし、キリストにありて世の爲めに磔殺せられしものとして日々を送れ。左すれば亦世に効ふの憂あらざるべきなり(二)。

第二は即ち爾曹全くかつ善にして悦ぶべき旨を知らんが爲めに心を

化へて新にせよ』といふと是れなり吾人の心は不斷に進歩的に更まらざるべからず吾人若し己れを聖靈の嚮導に任かせ奉れば聖靈即ち然かなし給ふべし。此に於てか吾人は神の聖旨に適へるものと世の靈に従へるものとを精神的に識別するを得るに至らん。信徒若し務め勵みて己が全心を更新するときは決して世に効ふとはあらざるべく却て神の靈之れをイエスに効はせ給ふべきなり(三)。

信徒諸君願はくはイエスが諸君の爲めに世と世の誘惑に勝つ力を得給ひたることを信ぜよ。亦信ぜよ。勝利者としてイエスを信ぜよ。左すれば諸君は亦勝利を得べきなり(ス)。

貴き主よ我儕は己を活る供物として主に献げたてまつれり 我儕は自ら己を神に献げたてまつれり 主が此世の屬に在したまはざるが如く我儕も世の屬にあらず 願はくは主の聖靈に由りて此世の靈の真相を教へたまへ 而して我儕は此世の屬にあらずして主に従へるものなることを願はさしめたまへ アーメン

一 世の快樂 舞踏は罪惡なるか 玉突をなすと如何なる害ありや 信徒は何故に芝居に行くを得ざる乎 人往々にして聖書の中に斯るを禁制する明白なる法文あらば善からんに思ふとあり。されど此法文なきは、神の深意ある所なり、若しかゝる法文ありた

らんには只人をして外觀的に敬虔なるものたらしむるに過ぎず。されど神は一々の人を試験し、以て其内心は果して世俗的なるか、果して屬天的なるかを驗し給ふ、諸君願はくは羅馬書十二〇一、二を暗誦し、聖靈に乞ふて之を活きたる法文たらしめよ、信徒若し己れを主に献げ、神の全くかつ善にして悦ぶ可き旨を知らんが爲めに心を化て新にせげ、舞踏王突の可否を知るとを得ん。然るを若し只地獄のみ是れ恐れ却て世に効ふとを恐れざるものは、聖靈が神の諸子に與へて見せしむるものは何物なるかを知る能はざるなり。

二 romeの書簡に惡魔の三位、一昧を脱けり。而して此の三位、一昧はエデンの園の試験に於ても將た又主の試験に於ても共に之を

第四十章 此世に効ふ事

三百九十

見るは如何にも驚くべきとなりさいふべし。

肉躰の慾

婦樹を見れば食ふに善く

此石に命じてパンとせよ

眼目の慾

目に美麗しく

惡魔彼に世界の諸國とその榮華とを見せ

勢より來る驕傲

智慧からんが爲めに慕はし、己が身を下へ投よ

三 諸君請ふ熟考あれ世に効ふことを發せんすれば只イエスに

効ふの一事あるのみ。願はくはイエスに効ふを以て諸君が靈魂の學問、靈魂の勉強たらしめよ。

第四十一章 主日

「神七日を祝して之を神聖めたまへり其は神其創造爲たまへる工を
盛し竣て是日に安息たまひたればなり」創二〇三

「此日の暮時すなはち一週の首の日弟子等ユダヤ人を懼るゝに因り
て集れる所の門を閉ぢおきしがイエス來りて其中に立ちかれらに
曰けるは爾曹安かれ」約廿〇十九

「主の日に我靈に感トてらつばの如き大なる聲の我後に在を聞けり」
一 歌一〇十、

出三十一
三十三
三十七
四十
結二十

人類は時間法の下にあるものなり。而して何事を行ひ、何物を得るにも
その爲めに時間なかるべからず。されば神は人類をして己れを交通せ
しめんとて不思議の方法により時間を與へ給へり。神は七日に一日を
別ちて己れと交通せしめ給ふ。

神か此日を授け給ひたる大目的は其の人類を聖別する思召たるの徴
證たらしむる爲めなりと稱せらる(イ)諸君願はくは「聖」てふ語の意義を
了解せんとを勉められよ。此語は蓋し聖書中最も大切なる言の一なり。
神は聖なる者なり、故に神が己れを啓示して其聖潔を分與せられたる
ものゝみ獨り聖なる者なり。吾人は神殿の聖なるを知る是れ神これに
宿り給へばなり。神は之を占有し亦己れを献けて此に住ませ給ふ。之れ

と等しく神は人類を聖別し人類を其有となし己れを之に満たせ又其生命を満たせ又其性質を満たせ又其聖潔を満たせ給ふ之が爲めに神は専ら己れのために用ゐしめんとて特に第七日を撰び且つ之を聖別し給へり而して神は亦人類を召して之を聖別せしめ之を主の日として承認せしめ給ふ所謂の主の日とは主の臨在の日特別なる働きの日なり大凡そ此日を聖別する人は神の約束し給へるが如くに亦神より聖別せらるべし(注意して出埃及記卅一の十二―十七を一讀せられよ特に其十三節を一讀せられよ)

神は第七日を聖別して之を祝福し給へり神の祝福には活ける力あり故に之を受くるもの一として祝福に満てる結果を得ざるとなし神は

創一〇廿
二廿八
同廿二〇
十七

賽五十六
七四
同五十六
十八
同五十六
三十四

草木禽獸人類を祝福し給へり故に能く増殖するの力あり(口)之と等しく神は第七日を祝福して之に其力を賜へり即ち此日を聖別するものは之れに聖別せられ又祝福せらるべしとの約束を賜へり吾人は平生安息日を祝福の日として考へ確かに祝福を來すの日として考へ以て之が習慣を養はざるべからず安息日に付隨せる祝福は極めて大なるものなり(ハ)

尙ほ安息日の制度に關して用ゐられたる第三の言は「神第七日に休み給へりてふ語是れなり之を出埃及記には「神安息に入り給へり即ち喜びに入り給へりと言へり神は其の安息を吾人に付與して吾人を聖別し吾人を祝福せんと望み給ふなり神は吾人が自ら己れの苦勞と弱點

三來四〇
七、七〇

とを負荷すべきものにあらで、神にありて安息すべきもの其事業を終へて後ちに取り給ひし安息に入るべきものなるを知らしめんとし給ふ。此の安息は外觀的に事務を中止するとはならず、然り是れ信仰の安息なり、之れによりて吾人は神が其凡ての業を竣工せしが故に休息如く休むなり。吾人はイエスの竣工し給ひたる事業を信じ神に聖別せらるべきを待みて、即ち此の安息に入るなり(三)。

イエスは其復活に由りて第二の創造を竣工し給ひ、吾人はイエスの復活の力に由りて生命と安息に入るが故に、第七日は茲に變じて一週の初日となれり。此點に關して聖書に特別の明文なし。されば新約の日に聖靈即ち律法に代りしとを知らざるべからず、主の聖靈弟子等を導

一約二十九
一廿六、徒
一〇八、徒
一〇七、哥前
一〇六、歌一
一〇三、歌一

出二十九
〇四十九
三、四十九
五、結三十九

びきて此日を祝福せしめ給へるなり。此日は常に主の甦り給ひし日なるのみならず、亦是れ間違もなく、聖靈の漲がれし日なりしなり。亦主が四十日の間に己れを顯はし給ひし日なるのみならず、特に亦聖靈の働きたる日なりしなり(四)。

此日に關して吾人の學ぶべき重なる教訓は蓋し左の如し。
安息日の主眼の目的は、諸君を神の聖なるが如く聖ならしむるにあり。神は諸君の聖とならんことを望ませ給ふ。聖は榮光なり、祝福より聖は神の祝福なり、神の安息なり、神は諸君を聖ならしめ、己れと己れの聖潔を以て諸君に満たさんとを望ませ給ふ(五)。
神は諸君を潔むるために先づ諸君を己れと共に居らしめざるべから

七〇廿
七廿八
彼前二〇
十五、十
六

詩六十二
哈二〇六
十、三、二
約十九、
三、九、〇

ず。己れの前に置き、己れと交際せしめざるべからず。諸君は凡ての苦勞と働きとを打ち捨て、主と共に休まざるべからず。神の子我に代りて萬事を竣工したるを信じ、天父我に代りて萬事に心をを用ひ給ふを信じ、聖靈我が衷にありて萬の働きをなし給ふを信じ、一切の心配苦勞を抛ちて靜かに休まざるべからず。苟も悔み改めて神に歸し、神に對して沈黙し、神の御前に靜座して神の言を聞かんとし、神に依頼して其萬事を爲し給ふべきを信する靈魂にして、若し聖き安息に入らん乎、神即ち之れに己れを啓示し給ふを得るなり。神は斯くの如くにして吾人を潔め給ふなり。

吾人の此日を潔むるや、先づ一切の外面的職務と塵事を抛棄するとを以てす。然れども特に神の日として、又其の設立當初の主意の如くに主に屬するものとして、神と交際するとに用ゐて之を潔めざるべからず。さて又一方に於ては、此の安息の日を只獨り公けに神を禮拜するの日として用ゆるが如きとあらば、是れ大なる心得違ひなり。神が諸君を祝福し、諸君を潔むるといふは、特に密室に於て面々相交際するにあり。教會に於ては、理會力活潑に運動し、説教、祈禱、讚美を聞くに其心を傾けざるべからず。されば其時には、心眞に神に向へりや否や、眞に神を喜びつゝありや否やを知るよしもなし。而して之を知るは、即ち靜かなる場處にあり。果して然らば、諸君願はくは、獨座主なる神と共にあるの習慣を養へ。皆に神に語るのみならず、亦神をして諸君に語らしめよ。亦諸君の

詩百三十三、十四

心をして其の静肅の中に神の聖聲を聞き得る神殿たらしめよ。神に在りて安息せよ。左すれば諸君の心に告げていはん『是れ我が安息所なり我れこゝに住まん』と(ナ)。

弱年の信徒諸君願くは聖なる祝ある此の安息日を貴重せよ。宜しく之に望を属すべし。宜しく之を神に感謝す可し。甚だ聖潔に之を守るべし。而して殊に此日を諸君の神と交通し、神の愛と活ける懇談をなすの日たらしめよ。

聖なる神よ主は我を潔めたまふ紀念として聖日を我に授けたまひし御恩寵を感謝し奉る。主よ主は此日を自ら取りて潔め給へり願はく

は我をも主のものとなして潔め給へ。願はくは我を教へて主の安息に入らしめ主の聖前に出て己が靈を静かになし、主御自身と主の愛を示されんが爲めに主の御慈愛のうちに安息むことを教へたまへ。而して安息日を迎ふる毎に主と偕にする永遠の安息を味はへしめたまはんことをアメン。

一 安息日は第一に是れ恩寵の媒介にして人類墮落の以前已に創立せられたる者なり。諸君は如何ほど之を重んずればとて重んずるべきの要あるとなし。

二 特に三位一體の神は如何に己れを此の安息日に啓示し給ひし

かを注意せよ。交なる神は此日に安息し給へり。子なる神は此日に死より甦り給へり。聖靈は其の特別なる所行によりて此日を潔め給へり。果して然らば、三位一體の神の交通と其有力なる所行とを此日に待ち望みて可なり。

三 『聖』といふ言の意義は何ぞや。出埃及記卅一章十三節によりて見る時は、安息日は果して何の記號なりや。神は如何様に此日を潔めたまへりや。神は如何様に吾人を潔め給ふや。

四 安息日を潔むるに就ては、俗社會と俗談話を避け、有用なる書類を讀ましむるの習慣を養ひて、小供を育て上ぐるゝと大切の樂なりの幼稚なる小供の爲めには、各所に日曜學校の設けあるべし。精年長けたる人は一處に集會し、本書の如きものを畫考とし、各人聖書

を讀み、聖書を研究せらるべし。

五 身体と靈魂の益を計るには、主の日ほど善き日はあるとなし。此日に於ては、惡魔の働きをして一切其手を歇めしめ、異邦人のため、道を知らざる者のため、其働きをなすべし。

六 本章の要點は左の如し。曰く、安息日は神の安息の日なり、神にありて安息し、神と共に安息し、神と共に交際するの日なり。吾人を聖めたまふものは神なり。而して其吾人を潔むるには先づ吾人を其有となし給ふ。

第四十二章 洗禮

「爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入て弟子とし」——太廿八〇十九、
 「信じてバプテスマを受る者は救はる也」——可十六〇十六

以上洗禮制定の言には洗禮の異義簡略に言ひ盡くされたるを見る「救へ」といふ言は(原譯者曰く「蘭語聖書は英語改正譯と等しく「弟子とし」てふ句を「救へ」となせり」是れ「萬國の民に洗禮を授け之を弟子とする」の義なり)已に信じたる弟子は其水に由りて洗禮を授けられたる如くに

加三〇廿
六廿七
同四〇六
七二〇十
四二〇十
二二〇
多二〇
五、六〇

三位一神の神の名によりて洗禮を受け若しくは之に入れられざるべからず即ち父の名に由りては授洗者たるもの父の愛子として新誕生新生命を授けられ(子)の名によりては罪の赦しとキリストの中なる生命とを授けられ(父)聖靈の名に由りては聖靈の宿在的進歩的更新を授けらるゝなり(子)故に洗禮を受けたる信徒は常に洗禮を以て三位一神の神の契約に入る門戸となし父と子と聖靈とが早晚我に其約束を成就し給ふ擔保品なりと認めざるべからず故に洗禮の中に含有する凡ての祝福を知り且つ之を味はんとすれば生涯之が研究に従事せざるべからず

聖書の他の文には三たびませ、二様の祝福を別々に説き顯はじたり斯

三約三〇
五〇

くして洗禮は神の小供となるに必要なる新生を含有すとせり。人は水と鹽に由て生れざれば神の國に入ると能はざるなり。されば洗禮を受けたる者は其父として神を有す。而して此父の愛に由り其子として此世を送らざるべからず(三)。

加 之洗禮は亦キリストに由れる贖罪と一層直接なる關係あるものなるなり。されば洗禮の第一義最單純なる説明は赦罪なり。罪を洗ひ去ることなり。赦罪は是れ凡ての祝福の門。凡ての祝福の入口なること常に然り。こゝを以て洗禮は亦キリスト赦罪的生涯を始むるの聖靈なり。併しながらまた終生の間維持せらるべきの發端なり。羅馬書の六章に洗禮を以て成聖を全ふするの秘訣となし、イエスと一體となる生涯に

三〇、三三、三六、三九、四二、四三、四四、四七、五〇、五三、五五、五七、六〇、六三、六六、六九、七二、七五、七八、八一、八四、八七、九〇、九三、九六、九九、一〇二、一〇五、一〇八、一一一、一一四、一一七、一二〇、一二三、一二六、一二九、一三二、一三五、一三八、一四一、一四四、一四七、一五〇、一五三、一五六、一五九、一六二、一六五、一六八、一七一、一七四、一七七、一八〇、一八三、一八六、一八九、一九二、一九五、一九八、二〇一、二〇四、二〇七、二一〇、二一三、二一六、二一九、二二二、二二五、二二八、二三一、二三四、二三七、二四〇、二四三、二四六、二四九、二五二、二五五、二五八、二六一、二六四、二六七、二七〇、二七三、二七六、二七九、二八二、二八五、二八八、二九一、二九四、二九七、三〇〇、三〇三、三〇六、三〇九、三一三、三二〇、三二七、三三三、三三九、三四五、三五二、三六〇、三六六、三七三、三七九、三八五、三九二、三九九、四〇五、四一三、四二〇、四二七、四三三、四四〇、四四七、四五三、四五九、四六六、四七三、四七九、四八六、四九三、五〇〇、五〇七、五一三、五二〇、五二七、五三三、五三九、五四六、五五三、五六〇、五六六、五七三、五七九、五八六、五九三、六〇〇、六〇七、六一三、六二〇、六二七、六三三、六三九、六四六、六五三、六六〇、六六六、六七三、六七九、六八六、六九三、七〇〇、七〇七、七一三、七二〇、七二七、七三三、七三九、七四六、七五三、七六〇、七六六、七七三、七七九、七八六、七八九、七九三、七九九、八〇〇、八〇七、八一三、八二〇、八二七、八三三、八三九、八四六、八五三、八六〇、八六六、八七三、八七九、八八六、八九三、九〇〇、九〇七、九一三、九二〇、九二七、九三三、九三九、九四六、九五三、九六〇、九六六、九七三、九七九、九八六、九九三、一〇〇〇

達する門戸と説けるは即ち此の理に由る『イエスキリストに合はんとてバプテスマを受けし者は即ち其死に合はんとて之を受けしなるを爾曹知らざる乎』尙ほそれより進んで四節以下十一節に至れば、イエスの死に合はんとて洗禮を受くべきと又イエスと共に隠りて其の新き生命を受くべきとに就き、一層詳密なる説明あり。又他の處には只一言に『凡そバプテスマを受けてキリストに入る爾曹キリストを衣たる者なればなり』といへり。是れバプテスマに關する極めて有力の議論といふべし。キリストを衣るといふ一事眞に是れ洗禮を受けたる信者の當然送るべき生涯なり。人水に入りて其下を潜り抜くるが如くキリストの死に合はんとて洗禮を受くる信仰告白者は、纏て是れキリストの

新生命を求て且つ活き且つ歩まんがためなり。又他の文に由れば洗禮は聖靈の約束と關係あり。此約束は當に重生の靈としてのみにはあらず、また宿在のため捺印のため、將た亦進歩的更新のため、天より信者に與へらるゝ賜物としてなり。重生の洗と天より豊かに灌かれし聖靈に由りて新にする事とを以て我儕を救へり。此におる更新にする事とは即ち聖靈の働きにして之に由り新に生れし者に授けらるゝ新生命は吾人の骨髓にまで浸透し吾人の凡ての思想、凡ての行為亦イエスによりて潔めらるゝなり。(一)
 以上列記せしパテスマに存する凡ての豊かなる祝福は皆信仰に由りて受けらるゝなり。信じてパテスマを受くる者は救はる可し。洗禮

二、一、四〇
 三、二、二〇
 五、六、二〇

は若し之れを人よりいへば其の今日まで主の弟子たりしが如く、將來も亦た主の弟子たりんことを欲する信仰の告白なれど之れを神よりいへば信仰を保證する印章にして換言すれば恩寵の寶庫全く開け生涯之れを受くることを得る身となりたる契約の記號なり。既に洗禮を受けたる信徒他の授洗式を見る時或は己れの受洗の當時を追憶する時は美氣自ら湧き起り三位一體の神が我れに成就せんことを望ませ給ふ完全なる救ひの生涯に勇進せざんば止まざるの信仰を生ずべし。聖靈は父の凡ての愛と子の凡ての恩寵を吾人に領有せしめんことを與へられぬ。されば洗禮の志願者は即ちキリストの死に合はんとて洗禮を授けられまたキリストを衣るに至らん。而して聖靈は其人の中にあ

りて、右等のとを其日々の經驗として之に賜ふべし(下)。

主なる神よ願はくは主の聖きバプテスマをして常に我等に活動せしめ之に由りて主の死のバプテスマを實驗せしめたまへ。願はくは主の小供のバプテスマを受るとに由りて豊かなる恩寵を授け給ふとを諸の所にある主の民に知らしめたまへ。アーメン。

さて吾人は幼年者の洗禮に關して如何に考へて善かるべきや。聖書の文面に執着する人即ち浸禮教徒は確かに吾人に對していはん、足下は幼兒の洗禮に關して既きたるを、たさび一文草にもせよ。

聖書の中より之を舉例するを得べき。吾人は之れに答へて曰はん、成るほど聖書の中には一箇の明文として之を既きたる所はあらざるも、其全體の調子よりいへば、充分之を既示せられたり。主イエスが何故に特に小兒を擧げざりしか。いふに、是れ畢竟其必要なりしが爲めのみ、神の契約は常に父母と小兒とを等しく籠むるものなるも、アブラハムの時より以後、神が其民の膺裏に刻み給へる慣例なり。神は家族の一人々々を相手とし給ふにあらで、其家族全體を相手とし給ふ。此故に子若し契約に戻るこゝたなき以上は、父の信仰能く子にまで其の益を及ぼすなり。

(い) アブラハムによりてイサクは其の分を得たり、イスラエルの子

は皆其父によりて契約の祝福の分を得、隨つて亦契約の記號の分に預かりたり。我わが契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て永久の契約となし汝および汝の後の子孫の神となるべし(創十七〇七)。

(ろ) 逾越節に於てさへ亦た斯くの如し。若し異邦人にじてイスラエル人と共に之を守らんとするものある時は、凡て其の人に屬する男は皆割禮を受けざるべからず(出十二〇四十八)。下りてキリストの時に至りては人の神の民となりたる時、或は神の民に加入せんと欲する時には其の子たるものば其の父と共に受け入れらるべし。然るのみならず、キリストにじて若し之れを變更する思召あらじめば、之がため必ずや命令を下し給ひたるべき答なり。

り。

(は) 主キリストは如何に明白に小兒に對する思想を發表し給ひたるかを見よ。曰く「神の國に居るものは斯の如き者なり」と、猶太人として特權を有したる小兒は神の國に於ては、基督信徒として同様の特權を有するとならばべきか。萬々左る理由なし、アブラハムに與へられし契約は凡ての小兒皆確かに之を有するなり。

(に) パウロが獄吏に答へて「主イエスキリストを信せよ然らば爾および爾の家族も救はるべし」と云ひし言は神の立て給ひし制度の尙ほ繼續せざるを確證するものなり。よし其家には小兒なかりしにもせよ、此の約束は即ち神の一箇人々々々に應酬し給ふのみならず、家族として之に應酬し給ふを確證するなり。

詩三十三
太四〇
一六〇
四一五
約十

羅八〇二
十三
前六〇
十五

十九、二
廿一、三

太廿六
六六〇
六五
約十

食せざるべからず。此の食物は即ち生命のパンなるイエスに外ならず。
 イエス曰く我を食ふ者は我に由て生く可し」と(イ)。此の方法に由りて吾人の
 此の天に属する食物たるイエスは、二様の恩寵の方法に由りて吾人の
 下に送らる。其一は神の言にして、其二は即ち聖餐なり。神の言は智識的
 生涯の方面より即ち吾人の思想によりてイエスを吾人に顯はし、主の
 聖餐は感情的の方面より即ち五官の感覚によりて是れ亦イエスを吾
 人に現はす。抑も人類は背兩性を具へたるものなり。即ち靈と肉とを具
 へたるものなり。救贖は靈より初まるものなれども、體て亦肉體にも透
 徹せんとするものなり(ロ)。救贖は此の死の身軀も亦靈と等しく榮光を
 受けざる間は完壁したかしとは言ふべからず。聖餐は主その萬物を己

れに服せしめ給ひし權力もて、此の賤しき肉體を變じ、己が榮光の身軀
 の如くならしむるの擔保なり。主が聖餐のパンによりて己れを與へ給
 ひたる所以は必ずしも有形のものが吾人に取りて一層明了に、一層測
 知し易きが爲めのみならず、然り聖書は身軀てふ一語を人間全部の意
 味に用ゐたる所往々あり。さればキリストは聖餐に由りて人間全部即
 ち靈と肉とを我有となし、其聖餐と寶血もて之を新にし之を潔めんと
 望み給ふなり。イエスは其身軀にさへ榮光を帯び給ふ。イエスは其身軀
 にさへ聖靈の交通あり、されば吾人もまた、其身軀さへ其聖餐に由りて
 養はるべく、又聖靈の働きに由りて新たにせらるゝなり(コ)。
 斯くキリストの聖餐もて養ふといふとは、主の方よりすれば即ち聖靈

五、羅八
十、三十一

哥前六〇
十五、同
二、〇、十
三、〇、十
三、〇、十

路一〇三
十七、〇、三
九、十二、〇、三

を以てし吾人のためよりすれば即ち信仰を以てするなり。先づ主の方よりすれば聖靈を以てするは、聖靈榮光の身体能力を吾人に付與し、之に由りて吾人の肉體さへ、聖書に應じてキリストの肢體となるが故なり。(三) 聖靈は血の生命力を吾人に與へて之を飲ましめ、斯くして其血は即ち吾人の靈魂の生命となり、喜樂となる。パウロは肉體の分受なり、酒は血の分受なり。

又吾人の方よりすれば、信仰を以てするは、信仰は吾人の想像に餘るばかり、聖靈の働きを依頼するものにて而して此の聖靈は吾人の靈内にイエスを付與し、イエスと眞に一體ならしむるが故なり。(ホ)。

是れ即ちハイデルベルグ信仰箇條の問答第七十六の主意なり。今之を

左に抜擧せん。

「キリストの榮光の身体を食ひ、又其の流せし血を飲むは何の意ぞや」

「是れ信仰の心もてキリストの苦痛と血を受け、之に由りて罪の赦しと永遠の生命を得るとのみならず、またキリストと吾人の間に等しく宿り給ふ聖靈に由り、吾人にキリストの聖體を彌相一致せしめ、イエスと吾人と天地其處を隔つれども、吾人は尙ほキリストの肉の肉キリストの骨の骨となり、斯くして吾人は一の聖靈によりて永遠に生き、永遠に支配せらるゝと、猶ほ吾人の肉體の肢體が靈魂によりて生き、靈魂によりて支配せらるゝが如くなるに至らんためなり。」

ならんことを希ふ望を以て聖餐に列ならしめ給はんことをアーム

一 聖餐に就て特に吾人の警戒すべきとは之を集會の儀式に過ぎずさなし若しくは一時の感情のみとするは是れなり。既成の演説は教養の感を通すと大なれども其力を祝福に至りては聖餐に及ぶべくもあらず。

二 食事に第一必要なものは飢なり。神に對する甚だしき飢渴は聖餐に欠くべからざるものとす。

三 聖餐によりてイエスは己れを吾人に與へんとを望み吾人の己れを獻げんとを望ませ給ふ。是れ大なる事なり、聖き事なり。

四 聖餐の垂るゝ教訓は其數多し。是れ紀念の宴なり、和合の宴なり。契約の宴なり。愛の宴なり。希望の宴なり。されど此等は枝葉の意味にして、其根幹の意味は即ち別に存す。それは他なし、活けるイエス最も深奥なる内部の一致に由りて己れを吾人に與へ給ふといふと

是れなり。神の子は吾人の與の與に下らんを望み給ふ。而して吾人と共に聖餐を守らんとを望み給ふ。我が肉を食ひ我が血を飲む者は我になり我も亦彼に居らん。

五 而して又イエスと一致するとは、即ち是れ愛と同情に由り、イエスの民と一致するとなり。

六 聖餐既成は準備既成と稱すべきいへとも、それ自ら準備にあらず。イエスと交通するに由りて有せざるべからざる銘々の準備

を補佐するに過ぎざるのみ。
 七 神の食卓に於て神と其宴を偕にするは名状すべからざる程に
 大切のとなり。願はくは諸君已れば基督信徒なるが故に行て其宴
 に列すると容易きとなりと思ふなかれ。然り諸君宜しく人なき處
 に退き、イエスを共に其食を偕にせんとするには如何なる心の
 備を整ふべきかにつき其指教を乞ひ奉るべし
 聖餐前の一週は全く之を其準備に費し、聖餐後の一週は全く之を
 回顧に費すと甚だ要なり。之につき参考として諸君に有益なる
 一書あり、サー、エツチ、ロース氏の『主の食卓、聖餐を當然に守るの
 助』(The table of the Lord: a help to the right Celebration of the supper. J. H. Rose)

第四十四章

從順

「然ば汝等もし善く我が言を聴きわが契約を守らば汝等は諸の民に
 愈りてわが寶となるべし」——出十九〇五、
 「エホバ大に汝を祝福みたまふ唯汝もし謹みて汝の神エホバの言に
 聴きしたるは是の如くなるべし」——申十五〇四、五
 「信仰に由てアブラハムはその承繼ぐべき地に往けその命を贖り之
 に違ひその往く所を知ずして出たり」——來十一〇八、
 「かれ子たれども受る所の苦難に由て順ふとを効ふ既に完全ければ
 彼に順ふ者の永救の原さなれり」——來五〇八、九

羅五〇十
九〇六
六〇十
一〇二
十四、二
十二、二

從順とは聖書に於て亦キリスト教徒の實行に於て最も緊要なる言の一なり人類が神の恩恵と其の生命とを失ひしといふは不從順の行ひを以てなりされば此の恩恵と生命とを更に再び回復せんとすれば從順の行ひを以てするの外はあらず(イ)。神は到底從順ならざるものを嘉みすること能はず又たその上に祝福を與ふること能はず『爾曹若し善く我言をきく我が契約を守らば汝等は諸の民に愈りて我が實となるべし』『只汝もし謹みて汝の神エホバの言に聽したがふに於ては汝の神エホバ大に汝を祝福みたまふべし』是れ蓋し永久不易の原理にして之れに従はざる時は人類亦た神の恩寵と祝福を得るに由なきもの

創廿二〇

とす。
吾人は主イエスの言に於ても亦之れを見る即ち曰く『若しなんぢら我が誠を守らば我愛に居らん我れわが父の誠を守りて其の愛に居が如し』と。イエスは父の愛に居り給へりされどイエスにして從順ならざるは即ち之れを得るに由なかりしなり而してイエスは是れ亦吾人に取りても等しく其の愛に居るの道なりと宣ふ。されば吾人若し其の愛に居らんとすれば即ち其の誠命を守らざるべからざるなり。イエスは吾人の爲め神に歸るの道を開拓すとして降生し給へり。此道は從順の道なり。イエスを信ずるとにより此の道を歩むものは必ず神に達すべきなり(ロ)。

十七、同廿十
八、同廿十
六、同廿十
五、同廿十
二、同廿十

七徒、八册、十七羅、
六、二、五、
一〇〇、〇、〇、
〇〇、〇、〇、

希伯來書第五章に所謂る「かれ順ふことを効ひ既に完全ければ凡て彼に順ふ者の永救の原となれり」とあるイエスの從順と吾人の從順との關係は如何に光榮のたととするぞ是れイエスと其の民とを一致せしむる緊なり是れ合同共和の點なり。イエスは父に從順なりき之れと等しくイエスの民はイエスに從順なり。イエスとイエスの民とは等しく從順なり。イエスの從順は常に民の不從順を贖ふのみならず、また之れを驅逐す。イエスと其の民とは同一の記號を有す、記號とは神に從順なること是れなり(ハ)。

此の從順は信仰の生涯の特質なり。之を信仰の從順といふ(三)。大凡そ此世のもの、中信仰ほど人の働きを鼓舞するものは是れならず、或は利

六、同廿十
六、同廿十

一五、同廿十
四、同廿十
五、同廿十
一、同廿十
申、賽八〇
廿八、賽六〇

益あらんと思ひ或は喜樂あらんと思ふ信仰は萬の働きの秘訣なり。信仰に據りてアブラハムは命を蒙りし時之れに遵へり。されば我働きも亦た信仰の儘なるべきなり。イエスが我をして罪の權下を脱せしめ之れに由て我れを從順せしめ、又た從順に差支なき状態に居らしむべしとの信仰は寔に我れを從順ならしむるに大なる力あり。又た從順に對しては天父之に報ゆるに豊かなる祝福を以てすべしとの信仰神の愛と宿在との約束を信ずる信仰從順の門戸を経て來る聖靈の盈滿の信仰は皆大に人の從順を強固ならしむるものなり(ホ)。

又此の信仰の力は猶ほ彼の從順の力の如く、特に活ける神と親しく交通すると否とに大關係あり。希伯來語にては「聲に從ふ」といふと「聲を

聽く』といふと同一字にして別字なし。要するに正しく聽くとは即ち從ふの準備なればなり。我が神の約束を確信し、又神の命令を確かに行ふといふは、人の言によらず、書籍によらず、直ちに神自らより神の聲を聞き神の聖意を知りたる時にあり。夫れ聖靈は神の聲なり、吾人は此の活ける聲の語るを聞けば之れに從順すること自から容易なり。こ果して然らば神が聖靈によりて語り給ふことあるべければ吾人をして沈黙神の前に座し、靈魂の門戸を開て之を待たしめよ。吾人聖書を讀む時若しくは祈禱を捧ぐる時、一回は一回よりも神に親炙せよ。左すれば吾人、是れ我が神の我に語り給へる所なり、我に與へ給へる約束なり、我に命じ給へる所なり、故に我れ亦之に從はんといふを得るに至らん熱心に

怠りなく「神の言を聽く」とは確かに從順の階梯なり。

從順は奴僕にも兵士にも子女にも臣民にも欠くべからざる者にして、即ち其の正廉を表する第一の標號なり。然るに活ける榮光ある神にして吾人の中に從順の徳を見ずして能く満足し給ふべきか(ト)否々吾人は最初より快潤なる嚴正なる精密なる從順を具へしめよ、是れ己が從順を以て吾人の生命たらしめ給ひし神の子と交通するの實證なりとす。

オ、父なる神よ主はキリストにありて我儕を主の子供となしキリストの從順なりし如く我儕も彼にありて從順なる小供となしたまへり

願はくは聖靈によりイエスの従順をして我儕の衷に榮光あり能力あるものとなし主の聖旨に従ふとを以て我儕の生涯に於ける最上の喜悅となさしめたまへ 凡て何事を行ふにも先づ主の聖旨を尋ね求め然る後ち之を行はしめたまへ アーメン

従順の生涯に要するもの左の如し。

一 断然たる捨己 我は最早事ある毎に、一々我れは之れに従ふべきか或は従はざるべき乎、又た我れは従はざるべからざるか、或は従ふとを得るとなご思ひ憫むべきにあらず。然り我れは従順の外亦何事をも知らずとは、是れ我れに取りて無論の事たらざるべし。

二 聖靈に由て神の聖旨を知る事 諸君速了するを止めよ、己れは測分か聖書を知るが故に、又神の聖旨を知るものなり。神の聖旨を知るさいふは心慧上のとなり。聖靈にあらざれば諸君に神の旨を知らしむるものは是れあらず。

三 己が正しき知る所のとを悉く實行する。凡ての實行は人を教化す。凡て正しきとを實行するとは人に従順を教ふ。或は言或は真心、或は聖靈の諸君に告ぐる所は凡て皆正しきとなり、直ちに之を實行せよ。又是れ聖き習慣の實行を養成すべく且つ一層の力を得、

一層の能力を得せしむるの練習たるべし。信徒諸君願はくは神に
 從順して正しき事を實行せよ。左すれば諸君必ず祝福を得可し。
 四 キリストの力を信する事 諸君は從順の力を有するものなり。
 諸君乞ふ之を確信せよ。諸君或は之を感知せざるにせよ、諸君は信
 仰に由りて其主キリストの中に之を有せらるゝなり。
 五 從順の祝福を喜んで確知する。從順は吾人を神に一致せし
 む。從順は神の満足と愛を得せしむ。從順は吾人の生命を強くす。從
 順は吾人の心に天の祝福を來す。

第四十五章 神の聖旨

「爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成る如く地にも成らせ給へ」太六〇
 十
 天の住所なる天の榮光は其聖旨の其所に行はるゝといふと是れな
 り。天の祝福を味はんと欲する人は其所に在す。天父を知らざるべから
 ず。而して其聖旨の天に行はるゝ如く之を行はざるべからず。
 「天國は終ることなき聖き王國にして其中心に神の聖位あり。無數の潔
 く自由なる靈物は神の聖位の周圍にありて各々其力と管轄の下に配

置せらる。而して彼等の生命には言語に盡す能はざる程豊かにして且多様な活動力充滿し、人類が此世にありて最高至貴となすものも凡て皆此無形界に起る事件の淡影に過ぎざ。又此等の靈物は各々自由に簡人的意思を具ふ。されど此の意思は其自覺的自由により自己の撰擇に任せて聖なる天父の聖なる意思と相合して一となれり。之に由りて其意思は幾千萬を以て數ふべく、其状また千差萬別なれども、之を一貫して行はるゝ所の意思は唯一のみ。即ち神の聖旨是れなり。凡て天の住民の豊かなる祝みある運動は其根源其目的一として神の聖旨に基かざるはなし。』

己に斯くの如き事情なるに、何故なれば地上にある神の諸子は此の意

思を其の最高の喜樂とは認めざるや。何故なれば「聖旨の天に成る如く地にもならしめ給へ」てふ嘆願は神の意思の嚴正奇蹟なるとも吾人が常に神の意思を喜樂とするを得ざるとの思想を連想せらるゝや。此の原因は他なし、吾人神の意思の榮光善美を見るも敢て愛の發顯と認め、權能喜樂の根源と認め、亦神の完全の標號と認めんとせざる爲めなり。吾人は神の制定する所に於て吾人の守る能はざる律法を見ては即ち之を神の意思なりと思ひ、又此の意思吾人の意思と相衝突する試験に過へば即ち之を神の意思なりと思ふ。ア、今後は亦吾人をして斯るを思はしむる勿れ却て神の意思により其凡ての愛其凡ての祝福の了解せらるゝやう、亦吾人の之を了解し得るやう、務め勵むべし(ロ)。

四、一、九、十、來、十、一、〇、

約、四、〇、三、同、
五、〇、三、同、
十、〇、六、同、
八、〇、三、十、
太、八、〇、
十、四、

第四十五章 神の聖旨

四百三十八

聖書が神の聖旨に就ていふ所を聽け而して此の聖旨により吾人に必
然與へらるゝ光榮ある事實を聽け。凡そ子を見て之を信する者は永生を得是れを遣しし者の意なり神
の聖旨はキリストを信する信仰に由りて罪人の救はれんと是れなり。
此の尊き聖旨に己れを委ねて生靈の救を求むる者は神必ず其人の事
業を祝福し給はんとの確信を得べし。是れイエスのなし給ひし如くな
さんとを期して神の聖旨を實行するに由る(一)。
「この小子の二人の亡るは天に在す爾曹が父の尊旨に非ず」神の聖旨は
其諸子の最も弱きものを支持し助成し加護すると是れなり。嗚呼眞實
に此の聖旨に合夥する人は果して如何計りの勇氣を有すべきぞ(三)。

三、〇、四、同、
廿、四、三、同、
五、〇、

十、八、〇、
十、五、〇、

「爾曹の潔きとは神の旨なり」神は其全心を以て又其意思の全力を盡
して吾人を聖ならしめんとを望み給ふ。吾人若し我が心を開きこは律
法にあらで神の意思なると吾人の願ふ所には神確かに之を與へ之を
行ひ給ふべきとを信すれば吾人は我が聖潔の確乎不動なるを感じて
喜ぶを得べきなり(ホ)。
「凡の事感謝す可し是れイエスキリストに由て爾曹に要め給ふ神の旨
なり」神の吾人に定め給へる喜樂感謝の生涯は即ち又神の吾人に爲さ
せ給ふべきものなり。神は吾人自ら妨げざる以上は其願ふ所を確かに
成し給ふ。されは何事にも神の聖旨の働き給ふ様獻して之を受くべし
(一)。

第四十五章 神の聖旨

四百三十九

オ、我父なる神よイエスが自己の思念に従はずして父の聖旨にのみ
 従ひたまひしは彼の榮光なり。イエスの得たまひし此の榮光を我
 得んことを希ひたてまつる。父よ我心を我眼を開きて主の聖旨の完
 全こと入其榮光を識らしめ主の聖旨に従ふ生涯の榮光を教へ給へ
 願はくは主の聖旨を識り喜びを以て之を行はしめたまへ。又我き
 し所は父に對する崇敬の念を以て之を實行せしめたまはんことを
 アトメン

幸福安寧の時に衷心よりして神の聖旨を成すとは、苦難災害の

二、神の聖旨を成すには吾人精神的に之を知らざるべからず。聖
 霊の光と聖霊の能力は兩々相並行す。聖霊の吾人に教へて神の聖旨
 を成すの道を吾人に

三、他人若し我に如何なる敬事をなすも、如何なる悪事をなすも之
 を神の聖旨として讚美するの習慣を養ふ可し。人罪なる事を行ふ
 は神の聖旨にあらざる。されど己に罪を犯したる以上は、之によりて
 其小供を試むるとは即ち神の聖旨なり。されば如何ほど大なる試
 煉にも亦如何ほど小なる試煉にも常に自らいふべし、我が此の困苦

の中にあるは全く神の聖旨なりと斯くする時は靈魂自ら安んずるを得べく、試煉の中にありて神を敬ふことを學ぶべきなり、此點に就ては古今有数の名著たる幸福の生涯(The Christians of salvation)の中なる「神は萬事に在す」とてふ一章を閲讀あれ、(譯者曰く本書は英文館の發行せる所山鹿旗之進氏の翻譯にかゝる)

四 神其の聖旨を人に傳へ給ふ時には之と同時に此の聖旨を或は承認し或は拒絶するの力をも賜へり。願はくは神の諸子よ己が意思を開き神の聖旨を其の全力を盡して之を受け、且つ之に満たされよ。我の意旨は神の聖旨と一致に出で、神の聖旨は我が裏に流るべき日々自覺すれば、其榮光其祝福共に地上のものにちざらんことを。諸君に之を成就するものは即ち是れ神の聖旨なり。

第四十六章 克己

此時イエスの弟子に曰けるは若し我に従はんと欲する者は己れを棄て其十字架を負ひ我に従へ」と太十六〇廿四

克己は主イエスが屢々語り給ひし行爲なり。イエスは之れを眞の信者たるものに誰しも無かるべからざる記號なりと繰り返しく述べ給へり。又たイエスは之れを十字架を負ふことと、生命を失ふこととに連説し給へり。(吾人の舊生命は極めて罪深く、其の狀決して何等の益にもなるべくあらざりしなり。されば新生命即ち神の生命をして自由に吾

三十九十八〇三
同二十路三

四〇二
七〇二
二〇二
四〇二
六〇二
加〇二
十〇二
同〇二
四〇二
五〇二
三〇二

人を管理せしめんとせば己れを棄て己れを死せしめざるべからず。弱年の信徒諸君主の教訓に適ふやう最初より全く己れに克たんとことを決心せよ。最初には苦しく覺ゆとも難て亦無量の祝福の淵源たるを見ん。克己をして吾人の肉に屬ける知識にも及ぼさしめよ。ペテロ曾て生來の知識を以て語りたる時主之れに對して「爾は神のことを思はず人の事を思へり」と宣ひしとあり。諸君は己れの私と己れの思想とに克たざるべからず。吾人若し神の聖旨を知らんと欲し、聖書と祈禱とを以てする吾人の理會力は、靈にもあらず、眞理にもあらず、神の禮拜もて吾人を欺くことなきことを知らざるべからず。諸君よ其肉に屬る知識を棄

太二六
九〇二
三〇二
三〇二
六〇二
同〇二
六〇二
七〇二
前〇二
廿〇二
廿〇二
六〇二
同〇二
六〇二
十八〇二

てよ之をして沈黙せしめよ。聖なる沈黙の中に、聖靈に場所を得せしめよ。神の聲をして諸君の心に聽せしめよ。諸君また凡ての肉情凡ての慾望と併せて己が意思に勝つべし。何事を行ふにも神の意思を撰びて之に従ひ、隨つて亦神の聖旨と相適應せざる慾望を滅却することとを無論の事とせよ。諸君願くは信ぜよ。神の聖旨には天の祝福あり、隨つて亦た克己は最初苦しく見ゆるとも自ら熱心に之れを修行する時は難て大喜樂となることを。諸君願はくば其の肉骸をして其の凡ての生命をして皆克己の法則の下に居らしめんことを。諸君亦己が名譽に克てよ之れを求めずして却て神の名譽を求めよ。斯

二番前九〇
二十五〇

太三〇五
約四七五
四〇八
同八〇七
同八〇七
二十〇六
前六

第四十六章 克己
四百四十八
くする時は靈魂に平安を得べし。イエス曰く「爾曹は互に人の榮を受く
る者なるに何で能信ずることを得んやと。諸君は其名譽を毀損せられ
又は誹謗せらるゝとあるも此の看護を神に委ね奉るべし。其小さきに
満足せよ。或は全く絶無なるに満足せよ。心の貧き者は福なり。天國は卑
ち其人の有なればなり」(マテ)
之と等しく諸君自己の力にも克つべし。神の用ふるを得給ふものは弱
きもの無きが如くなるものなりとの確信を抱くべし。如何に眞面目な
るにせよ諸君自己の勉勵にて神に事ふることを深く恐れ謹むべし。
或は自ら力あるらしく感ずるとありとも神の前にありてはなきにも
等じきものなるを自白せよ。斷えず己が力に克つとは即ち是れ神の

二五番後三〇
九同十

一羅十五〇
前三〇
弗二〇
四

力を受くるの方法なり。聖靈來り住し、亦神の力を携へ來るは、是れ力の
死滅したる人の心に於てなりとす(ヘブ)。
特に己が私利を棄てよ。己れを樂ましめんが爲めに生活するなかれ。却
て隣人を樂ましめよ。己れの生命を求むる人は却て之を失ひ己れが爲
めに生活せんとを願ふ人は却て生命を得ざるべし。されど若しイエス
の模範に倣ひ、其喜樂に與からんとする人は宜しくイエスの如くに其
生命を抛ち私利を犠牲にせよ(ト)。
愛する信徒諸君、諸君は悔改の時に能く己れの私と己れの服従すべき
キリストとを分別せざるべからざりしなり。又諸君は其時、「我れにあ
らず、キリストなり」といはざるべからざりしなり。さてそれは既往のと

となりつ、今後は日々に此の分別を堅ふせざるべからず。諸君斯くすれば斯くするほど罪ある己れの私を棄て、聖ならざる己れの業を抛ちイエスをして我れの萬事たらしむると、如何にも喜ばしく如何にも嬉しく成り行くべし。克己の途は是れ深き天の祝福の途なり。或は信徒にして一向此途に就て考へざるもの其數多し。彼等はイエスに依り頼みて刑罰を免かれんとを望む。されど彼等は己れの私より己れの意味より脱離せんとはせざるなり。然れども主の弟子を召したまふ告辭は、千古變せず『われに従はん』と欲ふものは己を棄てその十字架を負て我に従へ』とは轟くなり。

克己の力と克己の理由は、唯我といふ一小語の中に存す。『我に従はん』

と欲ふものは己を捨て我に従へ。舊き生命は吾人の中にあり、新しき生命はイエスの中にあり。而して新しき生命は舊き生命を驅逐するにあらざれば、其の主權を得ると能はず。己れの私にして主權を具へ何事にも權利を振ふとすれば、それは無きにも均し。宜なり、この故に日々己れを捨て、キリストに倣はざるべからずといふを喜ばざるとや。吾人はイエスと、イエスの教訓と、イエスの意思と、イエスの名譽と、イエスの利益とを以て吾人の心に満たしめざるべからず、されどイエスを知り、イエスを有する人は喜んで己れを捨つ。又イエスを最も貴重なりとなすが故に之を得んためには萬事を犠牲にし、己れの身を捨つるも尙ほ辭せざるなり(チ)

是れ真正なる信仰の生涯なり。我は本性の適意となし、適意と考ふる所に違はず、却てイエスの言「イエスの御意に随つて生活す。我は日々刻々に『我にあらざりキリストなり』我は無一物にて汝は萬事なりてふ驚くべき約束を憐む。『汝は既に死たり』故に最早力なく、意思なく、名譽なし。汝の生命はキリストと共に神の中に藏れあり。故に汝の中に榮ゆるものはキリストの力と意思とのみ。嗚呼、生靈よ、榮光のキリストをして汝の裏に住ましむるため、私の罪ある厭ふべき私を快然として棄て去るべし。

貴き教主よ、克己とは如何なることなるかを教へたまへ。我心を信ぜ

ずして何事にも己が思考に倚頼むことなからしめ給へ。又主を善く辨へ、主及び主の生命を得んが爲めには自己を献ぐるより他に爲すべき道なきことを教へ給へ。アーメン

一 人己が生來の智慧を棄つることにつき、テルスチーゲン曰く、人其の内に屬ける性質と、又其の性癖と、又其の情慾と、亦その意思とを殺し、非常に熱心、非常に沈黙なるものとなり、且つ己が知識の判断推論を放棄し、誠に單純に、誠に嬰兒の如きものとなるにあらざらんば、神と神の知識とは決して正論に知るを得べからず。吾人若し己が心を静め、心に神と偕に住まんことを欲せば、即ち己が心と意思と

を悉く神に献げ、萬事に於て己れの意味を放棄し、特に種々なる想像や理會の力を抛たざるべからず。靈の事に於ても即ち然り。抑も神の知識を得て而して後に開發する眞正の知識は即ち頭腦に於てせずして心に於てす。頭腦にありては眞理の觀念枯瘦を極む、されど心にありては眞理活きて發動し、萬事を人に指導す。心の中には光の活ける泉あり。されば心に神を味ふて生活する人は往々一目して他の畢生の力を盡して尙ほ發見する能はざる眞理を發見するなり。

二 諸君、右の一文を就讀玩味せられよ。之を讀まば吾人が屢々諸君に忠告して聖書を讀み、祈禱をなしたる時には、何時も暫らく瞑目し、神の聖前に沈黙せよと言ひし理由を發見せらるべし。是れ吾人が

が生來の知識をして其活動を廢止せしめ、心を開て神の前に置き以て神の御聲を聞くに必要のとなりとす。心の中には靈と眞を以て拜すべき神殿ありて存す。諸君靈の事に於ては、己が知識に依頼するなかれ、己が知識に克てよ。生來の知識は頭腦の中にあり。靈の知識は神の殿たる心の中にあり。ア、願はくは神の殿にありて神の御顔の前に聖き沈黙を守れ。左すれば神語り給はん。

三 「キリスト信徒克己の特色は不幸悲惨の境にあるも、心快潤に喜樂なるにあり。神の言は絶えず喜ぶとを吾人の義務となす。此喜はしき性質は、轉變災厄を足下に蹂躙し、激烈なる苦難の時は勿論、信徒の生涯に欠くべからざる日々刻々の克己の時にも、確立して一歩を之に輸するともあらざるべし。」

四 我わがが克かつべきものは何なんぞや。曰いはく己おのれに克かてよ。我わがは如何いかにして我わがに克かつべき所ところ、我わがに克かつべき時ときを知るを得うる。曰いはく何なんれの時とき、何なんれの事ことを問とはず、己おのれに克かつべし。諸君しよきん若もし此この答こたへを問ま違ちがひなく了ら解かいする能あたはずとすれば、諸君しよきんの爲ために之これを正せい當たうに解かい脱だつするものは、イエスの外ほかに亦また一人ひとりだも是これれなきを知しれ。基督きりすとを模範もはんとし、基督きりすとの教訓けうくんを受うくるとは克己こくぎの唯一いつの途みちなり。イエスの入いり來きたり給たまふにあらざれば己おのれの私わたくしは退去たいそせざるなり。

第四十七章

謹慎

「すなはち智慧ちゐなんぢの心こころにいり智識ちしきなんぢの靈魂たましひにたのしからん 謹つと慎しんなんぢを守まもり聰明こつめいなんぢをたもたん」一一箴箴二〇二〇、十一、
 「我わがが子こよこれら汝なんぢの眼めより離はなす勿なか 聰こつ明めい謹つと慎しんを守まもれ然しかばこ
 れは汝なんぢの靈魂たましひの生命いのちとならん」一一箴箴三〇三〇、廿一、廿二
 「爾曹なんぢら 増息たまふにして狼かたきに事ことを作なすべからず」徒徒十九〇十九〇、卅六

輕舉妄動けいぎやうだうは不信者しんじや間まに行いはるゝ罪つみなるのみならず、信者しんじやの間まに於おても、亦また往々むさむさにして災害さいがい不幸ふこうの原因げんいんたるなり。聖書せいしよにモ一一七七に、就つて記きして曰いは

母後六〇
七〇詩百
六〇三
八〇二

く「民メリバの水のほとりにてエホバの烈怒をひきおこし、かばかれ
らの故によりてモーセも禍害にあへりかれら神の靈にそむきしかば
モーセその口唇にて妄にもいひたればなり」と又ウザが神の權に觸
れしとに就ては曰く「エホバウザにむかひて怒を發し其誤謬改正譯に
は妄進とありのため彼を其處に撃ちたまひたり」と(イ)。
謹愼とは如何なることにして又何故に必要なるかは容易く之を説明
するを得べし。軍隊の敵地に進入するや、その安危は宿衛警誠して敵の
近づく時之を預知し之を通報する番兵の上に繋る故に斥候兵は敵地
の形勢と其強弱を窺ふために全軍に先ちて派遣せらる。斯くの如く前
途を視察し、周圍を視察するの用心は、信に欠くべからざるものなりと

大廿一〇
四廿一〇
路廿一〇
三廿一〇
弗廿一〇
八廿一〇
五廿一〇
母前八
太十路
六十七
同六十七

す。
基督信徒は是れ敵の領内に居住するものなり。故に其四面を圍めるも
のは皆陷阱たるべく、皆犯罪の機會たるべし。此を以て其一舉手一投足
も亦謹愼丁寧を旨とし、以て輕舉妄動に陥らざらんとを勉むべし。惑に
入らざらんとするものは眼を醒し、且つ祈る(ロ)。用心は其人を衛るもの
なり(イ)。
謹愼は舌を監守す。ア、信者にして尙ほ且つ不正を語らざれば己れの
欲する所を自由に語るも差支なしとなし、之が爲めに損失を蒙りし人
如何に多きとぞ。夫れ言多ければ其中必ず罪あり然るを人多辨を弄し
ながら尙ほ世の混亂中に捲き込るゝを知らず、淺猿しき限りなり。謹愼

一三〇廿
同四〇廿
三八〇廿
三六〇廿
一〇三
〇三
卅三

の救ひを全ふするなり(チ)。
而して吾人の靈魂は其四方を圍繞する百千の危険を警戒する爲め、何れの處よりか果して間斷なき宿衛の力を得來るべきや。斯くの如く警戒に警戒を盡くし最早確かに何等の危険もあらずとの安心を得る能はずとすれば徒らに是れ面倒に、厄介に、又誠に煩らはしきとにあらざるか。否々決して然らず。謹慎は正しく最高の安堵を來すものなり。謹慎は徹睡み給はず眠り給はざる天の保護者の保證と助力を有す神を信じて其靈の感通の下にあれば、謹慎は自然に其働きをなす。信徒は智き者の如く歩む。丁重謹慎は其人の行爲に威嚴を添ふるものなり。イエスを我を守り、我を警備すとの信仰より來る安心は、愛によりて吾人をイエ

スに繋ぐ又聖き謹慎はイエスを愛へしむるとなく、イエスを棄つるとなからんどの愛心より生出すべく、或は萬事力は凡てイエスにありとの信仰より生ずるものなり。

オー主よ願はくは我心を守りて輕卒なることなからしめ給へ。凡の事に由り他人を礙かせさらんが爲めに義人の謹慎をして我特性たらしめたまへ。アーメン

一 或處に馬と馬車と絶へず充分に準備し置く綿密の謹慎家ありけり。或人之れに對していへるやう、足下斯く常に心を盡して準備

をなすの必要は是れなからん。謹慎家之に答へて曰く、余は此の用心の徒勞に歸したるこそ更になしき。ア、此の一事に就て其の教訓を學ぶべき信者は如何に多きことぞ。又弱年の信徒にして其の悔改が、神の言に應ひ、能く義人の慎みたらんが爲めに祈りをなし得るもの如何に多きことぞ。

二 謹慎の根柢は自ら己れを知るにあり。己れの無能なるを知り、己が肉の罪多きを知ると益多ければ、謹慎の必要を感ずると益大なり。されば謹慎は吾人が克己の眞正の要素なり。

三 謹慎の能力は信仰に存す。主は吾人の保護者にして、吾人の心を贖る聖靈もて吾人を守る。吾人の謹慎は即ち此の保護者より來るなり。

四 謹慎の働きは吾人一身に限らるゝものにあらず。延めて隣人に及ぼし、之を礙かずとなく亦之に眼きの石を置くとなし(羅十四〇十三、哥前八〇九、同十〇三十二、腓一〇十)。

五 謹慎は安心も考按も皆之れを主に委ね奉り、已れば静黙して愉快を感ずるものなり。謹慎はエヘソの書記官が所謂「爾曹靖息にして、我に事を作べからず」との言を尊重するものなり。

六 吾人雄將と其勝利を見るに、謹慎は決して憶病にあらざるを知る。謹慎は最高の勇氣と兩立するものにして、又勝利の最も喜ばしき擔保なり。謹慎は輕舉を誦むるさいへども、又信仰の勇氣を鼓舞するものなり。

第四十八章 金錢

「銀子は何事にも懸するなり」——傳十〇十九
 「われ銀をわが手よりエホバに納む」——士七七〇三、
 「然らばわが金を兌換館に預置べきなり然ば我が歸たるさき本と利
 となを受べし」——太廿五〇廿七

信徒が克己を顯はし、謹慎の精神を顯はす機會多きがなかに、其世に處
 し、財産を處置するが如きも亦其一なり、此世に於ける凡ての價值凡
 ての財産は、金錢を以て其の標準となすが故に、此の金錢に對する行爲

約十七、
 十五、
 十六、
 一七〇、
 三、
 十、
 十

如何を見、其人の果して俗塵を脱し、能く己れに克ち、能く神に事ふる
 を得るものなるや否やを察知するを得べし。若し此の義を正確に解せ
 んとすれば、暫らく金錢に就て言ふべき所のものを考察せざるべから
 ず。
 金錢は何の記號なりや、曰く是れ人の金錢を儲くるに至りし、努力の記
 號なり、其努力に於て勉強に熱心に而して、又巧妙なりし、の記號なり、其
 事業に成功し、又神の祝福を受けたるの記號なり、更に又他の一點より
 考ふる時は、金錢は是れ我が之れを以て爲し得る一切の事の記號なり。
 他人が我が爲めになさんと欲する努力の記號なり、之れに由りて我が
 望む所のものを實行するを得る力の記號なり、金錢上我に依頼する

所ある人に對し我が此人に施すとを得る勢力の記號なり之を要するに、金錢は是れ金錢によりて得らるゝ凡ての産業、凡ての喜樂の記號なり。而して亦此の人生を樂しからしむる地上の凡てのもの、記號なり。然り是れ人生其れ自らの記號にして是れなくんば日用必需の食物もまた購買するに由なからんとす。斯くの如く金錢は是れ地上のもの、中にて最も望ましく最も効驗あるものゝ一なり。されば世人の之を貴重して止まざるは又怪しむに足らず。

金錢の危険は何ぞや。聖書と經驗とが深く此の使用法に就て警戒する所ある、金錢より生ずる罪惡は何ぞや。曰く金錢なきものは、金錢充分な

太六〇三
十一、約三〇
十六、雅五〇
四、路十六〇
二、提前六〇
七、九、十、十
七、七、七〇
非四、七〇、廿
三〇、八

る人の知らざる心配あり(一)。又た之れを得ることを熱望するの貪心あり(二)。又た他人の財産をさへ詐偽若しくは窃盜を以てせざんば之れを引渡さざるの不正直あり(三)。又た何事も己れに吸収し、之れを他人に與へざらんとする輕薄あり(ホ)。又た虎視眈々、金銀と土地を求むる貪婪あり(ハ)。又た神と人どに屬する分をも強取して之れを與へざるの盜奪あり(ト)。

金錢の恩徳は何ぞや。金錢の危険にして若し前記の如くに大なりとすれば、寧ろ金錢なきこと善からずや。嗚呼、金錢なからしめん乎。否々、金錢は靈の事にすら尙ほ大なる祝福を與ふるものなり。蓋し金錢は勤勉と労働を練磨し(チ)、注意と節約を奨励すればなり(リ)。又金錢は吾人の事業

八〇十
九〇十
四二〇
二四二〇
賽五十七
賽七十八
賽八十一
賽八十四
賽八十七
賽九十
賽九十二
賽九十五
賽九十八
賽一百
賽一百零三
賽一百零六
賽一百零九
賽一百一十二
賽一百一十五
賽一百一十八
賽一百二十一
賽一百二十四
賽一百二十七
賽一百三十

に神の祝福あるの記號たればなり。又た金銀は必ずしも之れを抛たず、必ずしも之れに執着せず、神の爲めに所有し、神の爲めに貯蓄することを得るを示す機會となればなり。又た金銀の力に由り、吾人は貧人に對して吾人の好意を顯はし、神の事業に對して吾人の熱心を顯はすを得ればなり。又た金銀は吾人の慈善によりて神の榮光を顯はし、世人の間に天の祝福の黄金を散布する手段となればなり。又金銀はイエスの斷證し給ひし如く、吾人は之れを以て天の寶に交易するを得ればなり。さて金銀の危険を免かれ却て其の正當の恩徳に與かるべき方法は、何ぞや。

代上二十
四〇十

提前四〇
四五〇

路十九〇

神をして諸君の金銀の主宰者たらしめよ。凡て金銀を受くる時には、是れ即ち「毎日の糧を今日も與へ給へ」と祈りに答へて神の贈り給ひし賜物となし、感謝を以て之を受くべし。昔の婦と共に「われ銀を金銀は之を神の所屬として其御前に貯ふべし」の言をわが手よりエホバに納むべし。諸君、その財貨を取り扱ふことを以て靈の生涯の一部たらしめよ。諸君は金銀によりて贖はれしものにあらず、キリストの寶血によりて高價に贖はれし身として其金銀を受け、其金銀を所有し、亦之れを所有すべし。聖書の金銀につき、財寶に就ての教訓を専ら講究せよ。天父の子が如何

徒三十五〇

出三十五〇
上六十九
徒二〇九
四〇四
四〇五
四〇六
四〇七
四〇八
四〇九
四一〇

に其の祝福を利用すべきかを教ふるものは獨り天父の言あるのみ。金錢は只諸君の爲めにのみ授けられしものにあらず。諸君と其同胞とに授けられしものなりとの事實を深く心に思ふべし。金錢の恩徳は能く他人に益を與へ、亦之を喜ばしむるものなり(マ)。

特に記憶せよ。金錢は神の靈の殿を建設し、又其の國を擴張するが爲めに之を天父に献げ、之を其王國の爲めに利用するを得ると。聖書に記載せられたる靈の祝福は、一として神の爲めに愉快に献物をなせし時にあらず。是れあるはなし。主の爲めに献金するにより、聖靈の降臨をさへ感ずると是れあるなり(シ)。

信徒諸君、諸君の心の最奥の思慮、諸君の心の最高の精神力、皆金錢に對する

する處置如何に由りて露はるゝとを了解せられよ。神に對するの愛隣人に對するの愛世に對する信仰の勝利、永遠の財寶に對する希望、管財者としての忠實、神の御用を達するの喜悦、愉快なる克己、聖なる謹慎、神の諸子の尊貴なる自由、皆金錢の使用如何に顯はるゝなり。金錢は是れ神と最も光榮ある交通をなすの手段にして、又神を崇め、神に事ふる幸福、喜樂の源となるべし。

主なる神よ、金錢の如何計り我靈の生命と密接なる關係を有せるかを正しく識らしめたまへ。願はくは聖靈に由りて、我を導き、我を潔め、金錢の出納併に仕拂ひ貯蓄を爲すにも常に主の聖旨に適ひ、又我靈に祝

福を得させたまはんとを アーメン

一 ヴォン、ウエスレー常に曰く、金錢の使用に就て三の規則ありき。ウエスレー之を實業に従事する人に示し、且彼等が之に由りて必ず利益を得たるべきとを斷言せり。

汝出來るたけ多くの金錢を儲くべし。勤勉なれ。出精なれ。

汝出來るたけ多くの金錢を貯ふべし。濫費する勿れ。儉約謹慎なれ。

汝出來るたけ多くの金錢を散すべし。是れ神の定め給へる金錢の運命なり。是れ汝及び他人に永久の祝福を及ぼす基なり。

二 歴代志上二十九章に記載せらるゝダビデの莊嚴なる祈禱を熱讀せらるべし。又之を靈魂に藏めよ。此の祈禱は愉快に獻金するにより起る神の祝福と榮光を吾人に教ゆるものなり。

第四十九章 基督信徒の自由

「罪より釋され義の僕となり 今罪より釋されて神の僕となりたれば聖潔に至るの果を得たり……」一羅六〇十九、廿二、
 「然れども今われら律法より釋されたり」一羅七〇六、
 「そは活す靈の法はイエス、キリストに由て罪と死の法より我を釋せば也」一羅八〇二、

自由は神の諸子たるもの、一大特權として聖書に記載せられたり。國民が何物を犠牲にするも惜まざりしもの自由の如く然るものは、歴史上即ち之を見るべからず。奴隸は是れ人民の沈淪する最も卑賤の境遇

○四出
一〇十
一四

なり。是れ奴隸にありては、人自ら己れを處置する能はざればなり。果して然らば自由は是れ萬物その本然の法則に遵ひ即ち其の性質に遵ひ自ら生長するを得るの境遇なり。自由なき時は何物も其到達すべき地に達する能はず、其備へざるべからざる様を備ふると能はず。是れ人と動物とを問はず、有形に無形と論なく等しく其の然る所なり。昔レイスラエルの神が其民を埃及の奴隸より贖ひ出し之に與ふるに神の民たる尊貴の自由を以てし之を以て罪惡の奴隸より人を救ふて神の小供たる自由を得せしむる永久の模範としたまひたるは益し之が爲めの故なり(イ)。此故にイエス地上にあり給ひし間にいへるとあり「子もし爾曹に自由を賜なば爾曹誠に自田を得べし」と、父聖靈もキリスト

三、同六
申、同二
約、同八
十、同三
一〇、同四
一、同五

約八〇三

第四十九章 基督信徒の自由

四百七十八

が吾人を自由にし給ひし其自由を堅く守りて立つべきを吾人に教ゆ。若し夫れ此の自由を知ると正鵠を得ば、神の恩寵が吾人のために準備し給ひたる人生の最大榮光の一を發見すべきなり(一)。
前に掲げたる羅馬書の三文は何れも潔めのとを論じたるものにて、その中に三様の自由を論じたり即ち其の第六章には罪惡より釋さるゝ自由、第七章には法律より釋さるゝ自由、第八章には罪の法律より釋さるゝ自由是れなり。
第一罪惡より釋さるゝ自由(羅馬六〇七、十八、二十二)此には罪を人を主宰する權力となし人は此下に拘引せられ束縛せられ強めて惡の奴隷とせらるゝとなせり(二)。然れどもキリストを信じ之を一つにされるもの

七、四、
三、二、
九、〇、
二、十、
三、十、
四、十、
七、十、
四、十、

二、六、
十、〇、
五、〇、
十、〇、
十、〇、
十、〇、
十、〇、
十、〇、

は、其死に由りて全く罪の管轄を免かれたるものにて、罪は又此人の上は何等の權力をも有せざるなり、然るを此人若し尙ほ罪を犯すが如きとあらば、是れ其の信仰に由りて自由の身となりたるを忘れ、罪をして尙ほ其の管轄權を恣にせしむるが爲めのみ、苟くも信仰に由りて以上の如き神の言の嚴として存するを承認する人は、少しも罪の力に煩はざるも、となく我を罪より釋して自由にしたる信仰に由り、亦之れに勝つを得るなり(三)。

第二律法より釋さるゝ自由。是れ罪より釋さるゝ自由より尙ほ一層深く吾人を導びきて恩寵の生涯に進ましむるものなり。聖書にまれば、律法と罪とは常に兩々相并行す、「罪の力は律法なり」。律法は吾人の罪

第四十九章 基督信徒の自由

四百七十九

五、同七十
五、同七十
三、五、同七十
三、五、同七十

をして尙ほ益々大ならしむるのみにて其他に何等の効力もあるもの
にあらざらん。律法は吾人の罪の標號にして毫も罪を撲滅する爲め吾人
に助力するものにあらず。却て徹頭徹尾之に服従せんとを督促し徒ら
に吾人をして罪の權下に失望の嘆を發せしむ。大凡そ信徒にして律法
より釋されたるを思はざる者は即ち依然として何時までも罪の下
に居るべし(一)。キリストと律法とは同時に吾人を支配するを得るもの
にあらず。信徒にして律法を實行せんとすれば吾人は多々益々罪の囚
虜となり了るべきのみ(二)。故に信徒たるものは斷然律法より釋された
ることを知らざるべからず。吾人の外に立ち吾人の上に立ち汝何々せ
ざるべからずと督促する律法の權下を脱せしことを知らざるべから

ず。左すれば其人初めて罪より釋されて自由となりしを悟るべ
きなり。

第三罪の律法より釋さるゝ自由。こは吾人の肢體にある罪の方より
實際放釋せらるゝことなり。吾人がイエスに由て有する所のもの罪と
律法より釋さるゝ自由は皆是れ神の靈の吾人の心に爲しむる所なり。
故に曰く「活す靈の法はイエスキリストに由て罪と死の法より我を釋
せば也」。吾人の中なる聖靈は律法に代りて吾人を支配す。故に曰く「靈に
導かるゝ者は律法の下に居らず」。律法より釋さるゝとは決して外部の
事にてはあらず。却て聖靈が吾人を支配し吾人を嚮導すること多きに
從ひて起る内部の事なり。故に曰く「主の靈ある所には自由あり」と吾人

は聖靈の法の支配を受くるに従ひ、律法より釋され、又罪より釋さるゝなり。吾人此に至れば、神の諸子として、自由に我が爲さんと欲する所を爲すべく、自由に神に事ふるを得べきなり(チ)。

自由とは我が欲する所我が爲さるべからざるを遂ぐるに何等の妨害をも受けざる状態をいふ。換言すれば自由は、我が欲する所を行ひ得るの謂なり。吾人を支配する罪の力、吾人に逆ふ律法の力、吾人の中なる罪の律法の力は、皆是れ吾人を妨害するものなり。然りと雖、聖靈の自由に確立する人は、即ち是れ真正に自主の人にして、何物も其の欲する所、其の爲さるべからざる處を妨害若しくは遮断するものあらず。上に向ひて、蠱々生長し、其の生長するに何等の妨害だも受けざるは、即ち

樹木の性質なるが如く、神の諸子も亦た生長せざるべからざる點にまで生長すべきなり。而して聖靈の此の自由に導びくがまに、信仰の生涯に於ける自己の力を意識して、自ら喜びに満たさるべし。而して歡呼していはん、『我れは我れに力を予るキリストに因て、諸の事を爲し得るなり。』常に我儕をしてキリストに在りて勝を得しむる神に感謝す』

俘囚となりし者に自由を與へんが爲め、聖靈の油を灌かれたまひし神の子よ、我をも眞實自由なるものと爲したまへ。我神なる主よ、主のうちなる生命の靈に由りて我を死と罪の法より釋し給へ。我は主に由

りて贖はれし者なり。願はくは主に任ふることを毫も妨げられざる自由の者として生しめたまはんとを。アーメン

一 信徒の自由は其人全局に及ぶものなり。其人もはや、人定の制度や、教訓に拘束せらるるものにあらず。故に曰く「爾曹は價をもて買れたる者なり人の奴隷となる勿れ」(哥前七〇廿三、西二〇九)又た此の世に對しても自由の權を有し神の與へ給ひしものを使用するに就ても自由の權を有するが故に之れを所有し、之れを施與し、之れを受領し、之を犠牲にする皆其の隨意たるなり。(哥前八〇八、同九〇四、五)

二 此の自由は不法不正の謂にあらず。吾人の罪と律法より釋されて自由なるは、聖靈に由りて神に事へんが爲めなり。吾人は律法の下にあるものにあらず。却て是れ吾人の隨意と愛心とを以て、吾人を愛し給ふイエスに己れを獻げたるものなり。(羅六〇十八、加五〇十三、彼前二〇十六)斯くの如く吾人は律法の下にあらずといへども、決して律法なきものにあらず。却て律法の中にあるものなり。新しき高尚なる律法、「活かつ賢の律法」、「自由の律法」心に銘されたる律法は是れ吾人の規矩準繩なり。(哥前九〇二十一、雅一〇十五、同二〇十二)

三 此の自由は神の言より其の養分を得べく、又言によりて養分を得べし。言我の中に在ると益多く眞理我が中に生くると益多けれ

ば我は愈自由となりん(約八〇三十一、三十二、三十六)

四 自由は愛に由て顯はる、我は今キリストの如く他人のために己れを棄つるを得るやう、法律より自由になり、人より自由に、社会より自由なり。(羅十四〇十三、廿一、加五〇十三、同六〇)

五 斯くの如く愛に由て神に事へ且つ隣人に事ふる尊貴なる自由は靈の事なり。吾人は如何なる手段を以てするも之を握むと能はず之を引くと能はず、唯聖靈の生涯に由て之を知るとを得るのみ。『主の靈ある所には自由あり』(靈に由て導かるゝ者は律法の下にあらす)されば吾人を自由ならしむるものは即ち聖靈なり。乞ふ吾人をして、聖靈の引くに任せ、神の諸子の尊貴なる自由に至らしめよ。『活す靈の法はイエスキリストに由て罪と死の法より我を釋せ

ばなり』

第五十章

成長

「神の國は人種を地に播き如し日夜起臥する間に種はえいで、成長
 とも其然る故を知らずそれ地は自から實を結ぶものにして初には
 苗つぎに穂いで穂の中に熟したる穀を結ぶ」——哥四〇廿六、廿八
 「全体この首により神に育てられて長なり」——西二〇十九、
 「長て首なるキリストに効しめんが爲なり彼を本とし全體育つなり」
 ——弗四〇十五、十六

死は常に静止して活動なく、生命は常に運動し常に進歩す増加若しく

弗四〇十
 一〇、四、後

は成長は是れ凡ての受造物の法則なり随つて亦人の中なる生命は將
 來必ず増加すべきもの、又常に彌々強堅となるべきものなり植物をし
 て充分なる成長を遂げ且つ其果を結ばざるを得ざらしむる生命と發
 達力とは即ち種子の中と地中に具はれるが如く、永生の種の中にも又
 其の推進力を具へ、其生命をして常に神の力を以て増加成長せざるを
 得ざらしめ、吾人が完全の人となり、キリストの完きが如く完くなるま
 では曾て止むことあらざるなり(イ)。

さてキリストは此の自ら生え出で、生長し果を結ぶ種子の譬喻を用
 ゐ、吾人に教ふるに此の靈性の生命の増加につき極めて大切なる二の
 教訓を以てし給へり。一は即ち種子の中に本來具はれる生長力にして

又一は生長の漸進是れなり。
 此二の中其の第一は即ち益々恩寵に生長し、益々恩寵に進歩する爲めに何を爲すべきかを疑ふ人々に與へたる教訓なり。主曾て身體に就て教へ給ふて曰く、「爾曹何ぞ思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや野の百合花は如何にして成長かを見よ」と。それと等しく今亦た此の靈性の生命の發達に就ても主は尙ほ吾人は何を爲す能はざるもの吾人は何を爲すの必要なきものなるを教へ給ふ(三)。種は人の眠れる間に生え出で、成長し而して人は其の如何にして斯くなりたるを知らず如何にして地が斯くの如きものを發出したるかを知らず、是れ諸君の實驗する所にあらずや。人一たび種子を播けば、其の生長は之を神の御配

何十四
 十六、廿
 六、廿七
 五、廿七
 三十

詩九十二
 〇十四、二
 〇三、四、三

耶四〇十
 三、四、十

慮に一任し奉らざるべからず。人自ら思ひ煩らふべからず、只安心せざるべからず。
 果して然らば人は何を成すべからざる乎。曰く人は何を爲すの力なし、生命の力は内よりして來たるものなり、我れに植を付けられたる生命より來たるものなり、聖靈より來たるものなり、故にまた人の如何ともする能はざる所なり、只神之れに生長の力を與へ給はん(八)。
 人のなすべき所は只生命をして己が儘に成長せしむると是れあるのみ、苟も生命の成長を妨ぐるものは即ち之を除去し、または來らしむべからず、荆棘若し植物の有せざるべからざる土地を塞ぎ肥料を横奪するが如きとあらば、人之を取り去るとを得(三)。植物は獨り自ら其土地を

專有せざるべからず。之がために用心を盡すを得るものは即ち農夫なり。さすれば植物は自ら益々成長せん。基督信徒も亦然り。新生命の發達を妨ぐるものは即ち之れを取り除かざるべからず。心を悉く新生命に授與して一局部も残す所あるべからず。宜しく新生命をして其の全部を專有し、占領せしむべし。左すれば生命は自由に圓満に成長すべきなり(ホ)。

亦農夫は或は飲料或は食物植物の必要に應じて即ち之を供給するとを得。言を換へていへば植物の要するがまに之に肥料を施し、之に水を灌ぐとを得。信者も亦斯くの如し。新生命の爲めに祈禱をなして神の言により其滋養分を供給し、且つ聖靈の活ける水を供給するを得

ることを知らざるべからず。新生命はキリストの中に植ゑられたるものなり。新生命はキリストより出で、神の力を以て發育す。されば人宜く信仰の作用に由り、根底をイエスに定めよ。左すれば新生命は獨り自ら生長せん(ホ)。又之れになくてならぬものを與へよ。之を妨害するものを取り除け。左すれば生命は自ら成長し、自ら發育せん。

次に此の譬喩の第二の教訓たる成長の漸進に説き及ばん。初には苗つぎに穂いで穂の中に熟したる穀を結ぶ。左すれば何物も之を一時に求むるなかれ。時日の猶豫を神に與へよ。吾人は信仰と忍耐によりて神の約束を嗣ぐとを得るものなり。所謂の信仰とは萬事悉くイエスの中にあることを知る是れなり。所謂の忍耐とは神政の規則と秩序に據り、萬事

三〇六
來三〇六
五〇七
五〇七

その時機の來るを待つ忍耐是れなり時日を神に與へよ時日を新生命に與へよ植物の生長するは其地中に定住して動かざるが爲なり新生命の生長するは恩寵の中に定住し神が吾人を植ゑ給ひしイエス自らの中に定住し而して變動するとなきにあり(ト)。

然り新生命には只充分の時日を與ふれば足れり祈禱の時神と交通するの時斷へず信仰を練磨するの時世俗と判然別離するの時を與ふれば足れり諸君新生命には時を與へよ靈魂の中なる神の生命が發育成長してキリストにより完全の人となるは徐々たれども確實なり隱微なれども眞實なり外面弱きが如くなるも天の力其中にあり。

主なる神よ主の子供等の信仰を強め彼等の成長發達は主の聖手に由れることを信ぜしめたまへ 彼等の衷には如何に貴く且つ能力ある生命の主に由りて植付けられあるかを知り此生命は神の力に由りて愈々増殖するものなることを了らしめたまへ 彼等をして信仰と忍耐とを以て主の約束を有たしめたまへ 斯る信仰を以て凡て生命の成長を妨ぐるものを除き成長を助くるものを取り主の御行を輝かさしめたまはんとを アーメン

一 植物に取りて肝要のものは土地なり植物は此中に立ち之れに由りて其力を吸収す信徒に取りても土地は即ち肝要のものなり。

土地は即ちキリストをいふ。キリストは萬事なり。信徒は此のキリストにありて成育せざるべからず。蓋しキリストによりて其の身体は即ち發育を全ふすればなり。信仰によりてキリストに居る、是れ最も大切なる事なり。

二 記履せよ、信仰は靜穩安固の地に之を置かざるべからざるを。又記履せよ、成長は恰かも神の御手にある百合花の成長の如くなるを。又記履せよ、吾人が益強くなり益發育する爲めに神之を監視し給ふことを。

三 吾人斯くの如き強固なる喜樂なる信仰ある時は、「神の榮の權威に循ひて賜ふ諸の能力を得て強くなり凡の事よるこびて恒忍かつ久耐得るものとなるべきなり」(西一〇十一)

四 神吾人の成長を願ふといふの信仰は、一切の心配を取り除き、且つ吾人のなさざるべからざる二の事を爲すの勇氣を興ふ。二の事は新生命を妨ぐるものを取り除くと、新生命の發達を助くるものを發生せしむると是れなり。

五 植付けと生長との間の區別に注意せよ。植付けは是れ一時の作用なり。土地は一時に種子を受く。其後は徐々に生長するなり。罪人も亦然り、何の猶豫もなく、即ち直ちに神の言を受けざるべからず。されば悔改の前には一瞬時の猶豫あるべからずといへども、それより後、種子の成長は漸々の作用なり。

六 大切なるものはキリストなり。吾人の生長はキリストよりす、又キリストに於てす。吾人は如何にして果を結ぶやを知らざれども、

キリストは即ち自ら果を結ばしむる所の土地なり。諸君日々キリストと交通するを怠るなかれ。

キリストに居れ (Abide in Christ) と題する一書なり、絶えずキリストと交通する多幸の生涯に關し、一ヶ月間の讀料として論述したるものなり。

第五十一章 聖書の研究

「われなんぢの法をいつくしむこいばかりぞやとれ終日これを深くおもふ」——詩百十九〇九十七

「なんぢら聖書に永生ありき意て之を探索この聖書は我について證する者なり」——約五〇卅九、

「惟かれらが聞し所の言はその信仰劑ざりしが故に聞る者に益なかりき」——希四〇二、

本書の巻頭には恩寵の生涯に於ての神の言の用法を説けると只一二

可七約十前三一詩百四後十
四六三二〇廿廿六〇廿
廿八〇六〇六〇六〇六
廿八〇六〇六〇六〇六
六〇六〇六〇六〇六〇六

三〇三〇三〇三〇三〇三〇
一〇一〇一〇一〇一〇一〇
一〇一〇一〇一〇一〇一〇
一〇一〇一〇一〇一〇一〇

の言は、確かに大祝福を諸君に與ふべし。聖書を読むには、之を聖靈其中に宿れる活ける言なりと認め、又信ずるものには、確かに實功あるべきを認めて之を読むべし。言は是れ種子なり。種子は生命を具ふ。而して自ら生長し、自ら其果を結ぶ。言も亦生命を具へ、自ら生長し、自ら果を結ぶ。諸君若し充分に了解する能はざる所あり、若し其力を感ぜざるならば、宜しく之を心に收め、之を咀嚼し、之を沈思せよ。されば自然に諸君の中に働きて、且つ成長を初むべし。神の聖靈は神の言と偕にあり、又神の言の中にあり。聖書を讀むには、皆に之が聽者たるのみならず、亦之が實行者たらんと。の覺悟あるべし。神は今此言を以て我に何を望ませ給ふかと自問せよ。

太五九一〇一〇一〇一〇一〇一〇
九七〇七〇七〇七〇七〇七〇
一七〇一七〇一七〇一七〇一七〇
路一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
雅一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇
十五〇一五〇一五〇一五〇一五〇

而して其答若し我をして之を信ぜしめ、且つ神の之を實行し給ふとを確信せしむるにありといふにあらんか。左すれば猶豫なく、中心より然か信じ、然か確信せよ。道若し何事か諸君に爲すべき事を命じなば、直ちに身を挺んで、之を爲すべし。ア、神の道を實行し、又神の道の命に、るがまに、亦その望むがまに、己れを之に任すれば、其愉快誠に言ふべからざるものあり。道の聽者たるなかれ、宜しく道の實行者たるべし。聖書を読むには、時を惜むな。かれ人時を費さざれば、地上に於て一物を得べからず。とは、余が日一日よりも、切に感ずる所なり。道に時を與へよ。道を讀まんとして、座する時は、毎に之に時を與へ、以て之を己が心

中六〇五〇九百九十九
十部九百〇五〇九百九十九
六十七五〇〇同

に入らしめよ。道に時を與へよ。熱心之に固着して日々月々變更あると
なかれ。諸君忍耐を以てすれば自ら道に慣れ亦一層之れに親しむべ
く。而して道は其働きを始めん。諸君願はくはたとひ解すべからざる所
あるも之が爲めに失望するなかれ。固執せよ。勇氣を振へ。道に時を與へ
よ。左すれば後に至り。道自ら瞭然たるものあるべし。ダビデは之を解せ
んとて晝も夜も之を沈思したるぞかし。
聖書を讀むには能く聖書を涉獵せよ。聖書の最好の註解は聖書なり。諸
君三四の聖句の主意相同じきものを取り之を比較對照せよ。而して其
同じき點と異なる點を審査し如何なる點までは相同じく如何なる點
は即ち異なるかを見よ。又た甲の場合に於ける神の言は同問題に關す

賽三〇四
約十十六
徒一七九
二〇七
三〇七
四〇七
五〇七
六〇七
七〇七
八〇七
九〇七
十〇七

る乙の場合の神の言もて其不明を明にし其の臆懼を確かにせよ。是れ
聖書を研究するに最も安全なる最も良好なる方法なり。聖書記者です
ら斯くの如くに聖書を用ゐたると即ち『又曰く』てふ言あるにて之れを
知るべし。諸君此の方法は餘り多くの時間と餘り多くの勤勞を要す
とて眩くことなかれ。此の勤勞は決して徒勞にあらず必ず其の報酬を
得べければなり。諸君此の世界に於ては勞働によらざれば何物をも得
る能はず。吾人の生命のパンも額に汗せざれば即ち之れを食ふこと
を得ず。天に行かんと欲するの人は決して勞働を費さずして之れに行
くと能はず。聖書を涉獵せよ。必ず諸君の勞に報めて餘りあるべきなり。
弱年の信徒諸君今最後の熱心なる一言を諸君に呈せしめよ。曰く諸君

の生長と諸君の能力と諸君の生命とは一に懸りて諸君の聖書の應用如何にありと果して然らば諸君神の道を愛せよ之れを蜜よりも甘きものとせよ之れを百千の黄白に優れりとせよ神は其の道に由りて諸君に其の心を啓示するを得るものにて又之れを啓示せんとするものなりイエスも又た其の道に由りて己れと其の凡ての恵みとを人に傳へんとするものなり聖靈も亦其道に由りて諸君に來り神の心と其の聖旨に従ひて諸君の心と其思想を更めんとするものなり果して然らば諸君聖書を読むとを以て靈性の衰弱を救ふ爲めとのみ思はず一身を之に委ぬるを以て世界に於ける我が要務の一なりとせよ左すれば神その道を以て諸君の心に充たすべくまた諸君の中にその道を成就

し給ふべし

主なる神よ主の聖語に由りて我儕は主の心と主の聖旨と主の愛に達し得るとを聖語を以て語り給ひしとを感謝したてまつる オー願はくは主の貴き聖語に對して犯せし罪を赦したまへ 願はくは又聖靈に由りて新しき生命を強め主の御語を味ふとを以て凡ての希望となさしめたまはんとを アイメン

一 詩百十九篇 此の一篇は恰かも聖書の中央にありて神の道を讚美し、神の道を愛好すると至れり盡せり吾人は只之を逐次に讀

過するを以て満足なりきは思はず、寧ろ其要點を積み互に對照比較して其主意を知らざるべからず。乞ふ吾人をして以下の數點を列擧し其答意を考究せしめよ。而して諸君も亦此の方法に倣ひ、充分に神の道の榮光に關する教訓を咀嚼せらるべし。

一 道の興ふる祝福 一、二、六、九、十一、十四、廿四、四十五、四十六、四十七等の諸節。

二 此の一篇中神の道を呼ぶに用ゐたる名稱。

三 吾人が神の道を應用する方法(之に従ひ—之を行ひ—之を守り—之を心にさめる等)

四 神の教訓を求むる祈禱 五十、十二、十八、十九、二十六等の諸節

五 全く道に従順する事 例せば九十三、百五、百六、百十二、百廿八、

百卅八の諸節

六 吾人の祈禱の基礎たる神の道 四十一、四十九、五十八、七十六、

百七、百十六、百七十

七 祈禱の力を信する基礎としての律法遵守 七十七、百五十九、

百七十六の諸節

八 祈禱の願望せらるゝ約束としての律法遵守 八、十七、三十三、

三十四、四十四の諸節

九 神の道に従ふ力 三十二、三十六、四十一、四十二、百十七、百三十、

百四十六の諸節

十 神の道に對する讚美 五十七、七十二、九十七、百二十九、百三十、

百四十四の諸節。

二 信仰より出づる従順の告白 百二十、百二十一、百六十八の

諸節

三 『汝と我』のものと我もの『』といふが如き文字に顯はるゝ神との親しき交際

以上余は只數點を指摘し、數節を列記したるに過ぎず。諸君宜しく自ら求めて尙ほ深く研究し、尙ほ多く學び、以て其の心の神の道に結さるゝに至るべし、是れ併しながら聖靈の諸君に與へんと欲し給ふ所なり。

左に信仰の人ジョーシ、ミューレルのいひたる言を擧ぐれば諸君心を潜めて一讀あれ。ミューレル曰く、『吾人が靈性の生命の力ば、神の道が吾人の實行に、吾人の思想に占領せる場所の廣狹に關係す。余は

五十四年間の経験に徴し、嚴肅に之を公言するを得るなり。余悔改の後三年の間は少しばかり聖書を用ゐたり。爾來余は屢勉以て聖書を渉獵し、驚くべきの祝福を得たり。その時よりして余は順次聖書を讀むと百回に及び、一回は一回よりも興味のいや増すを覺えたり。余や日々之を讀み始むる時には何時も新書の感ありたり。余や忠實に、日々規則正しく聖書を讀むの益如何に多きかを言ひ盡す能はざるものなり。余若し一日聖書を讀むに充分の時間を用ゐざるとあらば、其日は余に取りて損失の日なりしなり。』

『余の朋友等往々にしていふ、余は非常に多忙にして到底日課として聖書を研究する時間を有せざるものなり。余は自ら信す余ほどに勤勉努力すべき事業を有する人は蓋し稀なり。されど余は先づ神

「樂しき交際を爲し了へざる以上は、決して余の事業に着手せざるを以て其常とす。而して余聖書を讀みたる後は、一意専念に其日の事業に其身を委ね、即ち神の働きに其身を委ね、只その間の閑暇とては即ち祈禱のために費す數分間あるのみ。」(尙ほ拙著『祈禱の學課』(The School of Prayer) 二百五十六頁より二百六十三頁に引用せるメモリアル)の非常なる名頁を参考せられよ。

第五十二章 完成者なるエホバ

『われはいさたかき神によばらんわがために百事をなしたまふ神によばらん』——詩五十七〇三

『エホバはわれに係れることを全うしたまはん』——詩百三十八〇八
 『爾曹の心の中に善工を始し者之を主イエスキリストの日までに全うすべし』——腓一〇六

『そは萬物は彼より出で彼に倚かれに歸ればなり願くは世々衆神にあれアーメン』——羅十一〇卅六

吾人聖書を讀みダビデ不信仰に由りて失望に陥り「我早晚サウロの手にほろびん」どの嘆聲を漏らせしを知る。キリスト信徒も亦早晚己れの滅亡せんとを恐るゝとあるべし。是れ全く只己れを願ひみ、只己れの中にあるものを願ひみ、其信仰を専に神に置くとをせざるの致す所なり。是れ神の完成者たることを知らざるが爲めなりとす。斯る信徒は「我はアルバなりオメガなり始めなり終りなり首先なり末後なり」てふ名の意味を解せざるものなり。余若し眞に神を信じ之を凡てのものゝ始めとなさば又此の神は其始の繼續となし、其凡てのものゝ終として之を信ぜざるべからざるなり。

神は始なり、「爾曹の中に善工を始め給ひし神なり」「汝我れを撰べるに

約十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十

約六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十

非ず我汝を撰びたり』吾人の信徒となり又新生命を受けて感謝せざるべからざるものとなりたるは是れ世の基を置かざりし前よりの神の素志なり(イ)。されど今日未だ信仰に入らざる人は己れの不信仰を以て神の撰擇の然らしむる所なりとはいふべからず、是れ神は此人々にも同じ恩寵を與へ又献身の勸告をなし給ひしなればなり。天父の門外に札あり、書していふ「我れに就るものは我れ必ず之を棄てず」と。此の一語是れ何人も見るを得る所何人も解するを得る所なり而して一たび足を其門内に入るれば又一札ありて「凡て父の我に賜ひし者は我れに就らん(ロ)」と書せるを見るべく、又之を解するを得ん、此に於てか彼等神に就ての凡ての事を悟り、先づ神の命令に服従し、次で神の處置を窺ひ

創二八
詩一五
九三
四三
五三

奉るべきものなるを知らん。
されど此時忘るべからざる非常に大切の真理あり、神は此善き工を始
め給へりといふと是れなり。左すれば神を思ふ毎に必ず神は之を完全
すべしとの信仰益々強固とならん。神の忠實なることいひ、又其の愛と
いひ、又其の能力といひ、孰れか其一たび始め給ひし工を完成し給ふの
保證ならざるものぞ。諸君願くは神が幾度も幾度も其變らざる忠實を
誓約し給ひしとを聖書に由りて知らるべし。左すれば諸君の靈魂は之
に由りて安心し、且つ勇氣を得べきなり。
而して神は如何にして其工を完成し給ふや。大凡そ神より起源したる
ものは皆神に由りて支持せられ、而して早晚神に歸着し、神の榮光に歸

六、賽五
九、四〇
三、三〇
二、三〇
一、三〇
五、七

賽二十七
同五十一
十、三

着せん。諸君の生涯は其肉に關するものと、靈に關するものとを問はず、
一として父の保護に漏るゝはあらず。是れ徹終徹始諸君の上にて感化力
を有すればなり。諸君の靈魂の無聲の發達が、進行せざる時とては、晝
夜一瞬時だも是れあらず。是れ諸君に信仰だにあらば、天父即ち之を顧
りみ給ふが故なり。諸君は神の子として自己の運命を左右すべき力な
し、而して其中には諸君の念頭にだも浮はざるものさへ是れあるならん。
然るに神は吾人の知らざる間に其工を繼續し、且つ之を完成し給ふな
り。されど此れに只一の條件あり、他なし。諸君は之れに就て神を信任
せざるべからず。諸君は其信仰によりて神のなさせ給ふまゝに其工を
なさしめざるべからず。諸君は信仰を以て「エホバ我に係れる」とを完成

來十〇三
十五、三〇同
十五、六、二〇
十、廿一、二〇
十、廿五、〇

し給はん』と言はざるべからず。諸君は信仰を以て『我はわがために萬事をなしおへたまふ神によはらん』と祈らざるべからず。信徒諸君願はくは、其靈魂に満たすに、我が衷なる神の工の繼續と完成は全く懸りて神の手中にありとの思想を以てせよ(へ)。
而して神の完成し給ふ所豈尊貴ならざるものあらんや。吾人の靈性の生命に於ては神その聖と其子の像とを吾人に付與して其能力を顯はさんとの準備あり。神は其聖國に於て吾人に爲さしめんとする。凡ての事業に堪ふるものたらしめんとて吾人に其資格を與へ、吾人を其地位に置き給はん。神は吾人の身軀を其子の榮光の身軀と同じものと爲し給はん。吾人は神の子の天より下り、其民を集め給ふ日を待ちて可なり。

其時神の子は其撰み給ひしものを悉皆く集めて一軀となし、吾人を其榮光の中に受け、且吾人をして其榮光の中に住ましめ給はん。ア、吾人は如何にしても神は其工を完成し給はずとは考へ得ざるにあらずや。苟も神に之を信任する人には、神必ず之を完成し給ふべく、又榮光を以て之を完成し給はん。
神の子たるものよ、願はくは深き確信を以ていふべし、エホバ我に係れる事を完成し給はん。又必要に迫る毎に非常の勇氣を以て絶えずいふべし、我はわがために萬事をなしおへたまふ神によはらん。又萬物は彼より出かれに倚かれに歸ればなり。願くは世々榮神にあれ』といふを以て諸君の生涯の頌榮歌たらしめよ。

我に關はる主の御行を成就たまふ主なる神よ願はくは我を救へ導き
 我をして主を識り主を信せしめたまへ 願はくは新しき生命に關す
 る凡の思念をして喜はしき確信と伴はしめたまへ 我中に善工を始
 めし者け之を全うなしたまふべし

一 「終まで堪へ忍ぶ者は救はる可し」始よりしきて其益は極めて
 夥かるべし。吾人は其始めの望を堅持して以て終りに至らざるべ
 からず (太十〇二十七、同二十四〇十三、來三〇十四、十六、同十一〇
 十二)

二 聖徒の忍耐—聖潔に於て—は改革教會教義の特有的條款なり。
 更生は失ふべからざる恩寵なり。
 三 或信徒の墮落するは如何に心得て然るべきや。曰く彼等は一時
 の信徒たりしなり。彼等は只一時聖靈の働きに與かりたりしのみ

(來六〇四)

四 我は如何にして我の果して新生に與かりたるや否やを知り得
 べきや。凡そ神の靈に導かる者は是すなほち神の子なり「羅八〇
 十四」神我を受け給へりとの信仰は行により聖靈の導きに從ひて
 歩むにより即ち成熟し即ち強固となる。
 五 人如何にして我れは終りまで堪へ忍ぶべしといふとを確知し
 得るか。曰く完成者たる神を信する信仰に由りてなり。吾人は吾人

の保護者として全能の神を讃くを得。眞に己れを神に献げたる人、全く其工を完成し給ふ神を信する人は、主の我を守り、終りに至るまで棄て給はずとの確信を得べきなり。

神の子供も、宜しく其父と交通して其日を送るべし。二心なくイエスキリストを信し、退歩の恐れは皆取り除かるべきを信して其日を送るべし。聖霊の活ける捺印は終りまで諸君の堪へ忍ぶもの、確信たるべきなり。

新生命了

アンドリュウ、モレー小傳

アンドリュウ、モレー氏の實名は夙に南部亞弗利加全体に轟けり、後其書を著すに至りてや、其名漸く英語諸國にも知られ、今や世界通稱の著述家を以て見らるゝに至れり。

アンドリュウ、モレー氏の父は今より七十年前蘇格蘭より出て亞弗利加なるサラアツフ、カイチツトの荷蘭改革教會牧師となり、其事業に優渥なる神の祝福を蒙り、且つ南亞弗利加のため、少からぬ遺物を寄與したり。即ち其五子は皆荷蘭改革教會の牧師となり、其四女は皆教師の妻となり、他の一女は或る女學校の教頭となりたり。

本書の著者アンドリュウ、モレー氏は其の第二子にして、父を同老を習し、一千八百二十八年五月九日アラアツフ、カイチツトに生る。其兄のフ、メルゲマンに師りて大に學を研

んとするや、アンドリュウカ年僅かに九歳なりしが、兄に伴ふて亦歸國せり。斯くて此二人の兄弟は前後相次でマリシヤル高等學校に入り、且つ之を卒業し、此に其父より遺傳せる傳道心を一層涵養せられたり。即ち其在學中屢々ウィルヤム、メルンスの説教を聞きしが、是れ後に有名なる支那傳道者となりし人にて、二人の俠氣は此のメルンスに鼓吹蕭陶せられたるものを多しとす。

二人は卒業後荷蘭に赴き、ワトレヒト大學に入りて其神學を研精せり。此間書生の中心となりて信仰の熱火を傳へ、遂に學生傳道會を組織するに至れり。

ワトレヒトの卒業後、南亞弗利加に歸航し、兄はステレンボツシなる荷蘭神學校教授に任ぜられ、弟アンドリュウは現今ナレンツ自由國と稱せらるゝ地の牧師となれり。モーレー氏此職に就きし時、年甫て二十歳、此の廣大なる一地方に只一人の牧師として働き、數年を

果れしが、曾て失望に陥らず、其本營をプロームフチンティンに定め、不撓不屈の精神を以て傳道に従事せり。

此地の農夫等最初一見して牧師の余り若々しきを懼はす、されど其第一回の説教を聞くや早くも失望すべきにあらざるを知れり。續て其旅行し、傳道し、問答し、訪問し、此の自由國にのみ満足せずして、遂かにトランスバールまでも入り込むを見聞しては、其喫驚は俄かに感嘆の聲と變りたり。

人民は氏と禮拜を共にするを喜ぶことなれり。彼等は會堂までもなければ、通常野外に於て禮拜し、或時は熱日を遮るため天幕を張りて禮拜せり。此の勉強の結果は今に至りて尙ほ此地方に餘蕭を止むといふ。即ち此の自由國とトランスバールを旅行するもの路必ずモーレー氏によりて結婚に至りし夫妻に遇はざるとなし、而して彼等は皆モ

モート氏を靈の父と稱し、氏が來訪の紀念を保存するなり。此間に氏は一人の内助者を得しが、是れ氏が此地方の傳道に少からざる援助を與へしル。サーフナルド氏の娘エマ、ルサーフナルド是なり。新婦に取りては此地業より好もしき處にはあらず、されど一は其新郎のため、一は主の事業のため、健けにも凡ての艱難を嘗め、自ら先頭となりて諸の苦辛を肩せり。此間の夫婦の艱難甚しかりしかば、モレー氏は劇しき熱病に罹り、在焉として久しく癒えず、醫師は最早健康体に回復せすさまで斷言するに至れり。されど何ぞ知らん、こは是れ却てモレー氏が其事業を擴張するの回轉機ならんとは。是より幾許もなく、一千八百六十年に至り、喜望峰殖民地の一要島たるウストルより招聘せらる。成喜んで此聘に應じ、新勇氣を以て傳道に従事せしが、當時米國と愛蘭に始まりし、バイバルは東半球を一掃して此の南亞弗利加に達し、聖靈のウストルに顯せる力、

遂に赫如たるものありき。モート氏此間に立ちて能く其任を盡し、能く信仰を指導して人の混亂狂熱に陥らんとするを防げり。

氏が其口に述ぶる所を筆にせんとするに至りしは、此のウストルに牧師たりし間にあり。而して其處女作として顯はれしもの、内に「汝は何故信せざるか」といふ小なき一書と、本書即ち新生命あり、此の兩書、殊に後者は多くの人に祝福を及ぼし、今に至りて廣く喜望峰地方を荷蒙に行はる。兩書は最初荷蘭語を以て顯はれたるものにて、新生命は New Life を題し、之を英語に譯したるは、モレー氏なり。

モート氏ウストルにあると四年後招かれてクリブタオンに赴き、又同トキ、年月を此に送りたれど、種々の困難に遭遇して傳道思はしからず、遂に移りてウエリントンに至る。此地クリブタオンを距ると四十五哩、誠に愉快なる一邑にて、信者は俄國より

ノの子孫を其重もなるものとす。モーレー氏今尙ほ此に在りて愉快と成功を以て勤
きつゝあり。

氏此地に轉任して幾許もなく、米國マウント、ホリヨーク女學校のメレー、ライオンの生
涯と事業に感奮する所あり、遂に南亞弗利加にも同種類の女學校を設けんとすの決心を
起し、書を裁して米國に送り、以て教師を得んとせり。此乞に應じて米國より二人の女教
師來り、一千八百七十四年ウエリントンに「エーゲノー」女學校設立せられ、マウンド、ホリ
ヨークの教育法を用ゐ、南部亞弗利加の女生徒凡そ二百人を教育す。是より起りし結果
實に驚くべきものあり、されば之を摸して設立せられたる女學校亦夥からず。

氏は斯くの如くにして其教會と學校を監する傍ら弘く傳道に従事し、一時に許多の人
を悔改めしめたるを頗る多し。一千八百七十九年非常の大病に罹りて一時此種の働き

を中止したりしが、幸にして其健康回復するや、亦活潑なる運動を初め、到る處未曾有の
大群衆を得、各教會の牧師亦その時間の半を割て氏に寄附するに至れり。今や氏の足跡
は該殖民地の東部、自由國、トランスバール、ナタンの諸地方に普しといふ。

氏は亦ウエリントンにカフル族及び其他の民族に傳道する役者を養成する學校を
設け、此にて簡易なる學科を授く、而して此より出づる役者の成功、極めて著大なるもの
ありとぞ。

或はいふ、氏の説教、氏の著書は熱心と光輝を缺くの憾みありと。されど氏を知れるもの
はいふ、氏の説教を聞くもの其心の根底より動かされざるなく、今初めて信者となりし
が如く感ず、信仰の意味、献身の意味を深く知らんとを求むるに至ることを要するに氏
は非常に人の信用を得るの力を具ふ。其亞弗利加と英國との交渉事件に就て代員に舉

けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。
 けりあふん三回又教書の次書の議長たるは注園に下多るは其業して得難くあふん。

明治三十年十二月
 日印刷
 明治三十年十二月
 日發行



發行所
 京橋區銀座四丁目二番地
 堀田達治

印刷者
 京橋區四紺屋町廿六番地
 高田乙三

發行所
 京橋區銀座四丁目二番地
 教文館

印刷所
 京橋區四紺屋町廿六七番地
 英式秀英舎



